

宍道町埋蔵文化財調査報告4

島根中央地区団体営畜産経営環境整備事業に伴う

**清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書**

1985年3月

島根県宍道町教育委員会

## 序

本書は昭和59年9月から昭和60年1月にかけて、島根中央地区団体営畜産経営環境整備事業に伴い、事業者である島根県経済農業協同組合連合会の協力を得て実施した宍道町大字白石の清水谷遺跡、矢頭遺跡の発掘調査の報告書である。

今回の発掘調査は先に実施した分布調査によって発見された水溜古墳群の隣接地であり、広い範囲に分布する古墳群の一画を対象としたものである。

なかでも清水谷2号墓は出土した土器片などから宍道町でも初めて発見された弥生時代の墳墓であることがわかった。また矢頭谷を中心とする遺跡では住居跡と横穴が確認されたが、このことはこれまでに住居跡など発見されながらその調査資料が見当らないこともあって、今後の本町文化財研究に貴重な資料となることを確信している。

いずれ発掘した土器片等は整理の上、今年の秋に竣工予定の町歴史民俗資料館に展示し一般に公開する考えである。

今回の調査は事業に伴い調査をしたものであって緊急を要したため、調査の期間、調査費、なんなく調査員等種々の困難点もあったが、関係各位の積極的なご協力により調査のすべてをおわることができたことは感謝にたえない。

この報告書が埋蔵文化財の資料として広く一般に活用されるならば幸いである。

なお、調査発掘に当たり終始熱心なご指導、ご協力を賜わった島根県教育委員会を初め関係者の方々に心から謝意を表するものである。

昭和60年3月

宍道町教育委員会

教育長 山田鶴一

## 例　　言

1. 本書は島根県中央地区団体営畜産環境整備事業に先立って宍道町教育委員会が実施した清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査にあたっては、事業主体である農業経済連合会が発掘調査にかかる経費を負担した。

### 3. 調査体制

事務局 山田鶴一（宍道町教育委員会教育長）

野村泰久（同 教育次長）

庄司英夫（同 主任主事）

坂本美代子（同 主任主事）

高木聰（同 主事）

調査員 稲田信（同 嘴託）

調査補助員 青木昭夫 角田徳幸

4. 調査にあたっては農業経済連合会、島根県農業開発公社、増原産業株式会社の協力があった。また、島根県教育委員会文化課課長補佐蓮岡法暉、同主事西尾克己の両氏からは直接指導をいただいた。

5. 測量、実測には上記の庄司英夫、高木聰のほか、宍道町役場産業課高木和幸、内田隆、三島薰の各氏の協力を得た。

6. 本書の執筆、編集は事務局の協力を得て稲田がおこなった。

7. 遺物は宍道町教育委員会で保管している。

## 目 次

### 序

I 経 過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 遺跡の概要	4
IV 清水谷遺跡	6
1. 1号墳	6
2. 2号墓	9
3. 3号、4号、5号墳	11
4. 6号墳	13
V 矢頭遺跡	15
1. A区	16
2. B区	16
3. 矢頭横穴	34
VI 小 結	38

## 挿図目次

図 1. 穴道町全図	2	図28. 2号住居跡出土遺物実測図 5	25
図 2. 清水谷、矢頭遺跡と周辺の遺跡	3	図29. 4号住居跡出土遺物実測図	26
図 3. 清水谷遺跡、矢頭遺跡配置図	5	図30. 5、6号住居跡実測図	27
図 4. 清水谷 1号墳墳丘実測図	6	図31. 5号住居跡出土遺物実測図 1	28
図 5. 清水谷 1号墳主体部実測図	7	図32. " 2	29
図 6. 清水谷 1号墳西土壤群実測図	8	図33. 6号住居跡出土遺物実測図	30
図 7. 清水谷 1号墳出土遺物実測図	9	図34. 5、6号住居跡遺物実測図 1	31
図 8. 清水谷 2号墓墳丘実測図	9	図35. " 2	32
図 9. 清水谷 2号墓遺物出土状況図	10	図36. 遺構平面図	33
図10. 清水谷 2号墓出土遺物実測図	10	図37. 出土遺物実測図	33
図11. 清水谷（3号墳）実測図	12	図38. 矢頭横穴出土遺物実測図	35
図12. 清水谷（4号墳）実測図	12	図39. 矢頭横穴実測図	37
図13. 清水谷 6号墳出土遺物実測図	13		
図14. 清水谷 6号墳墳丘実測図	14		
図15. 清水谷 6号墳主体部実測図	14		
図16. 矢頭遺跡位置図	15		
図17. 矢頭遺跡 A区地形測量図	15		
図18. 矢頭遺跡 A区平面図	16		
図19. 矢頭遺跡 B区地形測量図	17		
図20. B区住居跡配置図	18		
図21. 1号住居跡実測図	19		
図22. 1号住居跡出土遺物実測図	19		
図23. 2号住居跡実測図	20		
図24. 2号住居跡出土遺物実測図 1	21		
図25. "	22		
図26. "	23		
図27. "	24		
		図版 1. 清水谷 1号墳発掘調査前、後	
		図版 2. 1号墳主体部、2号墓調査前	
		図版 3. 2号墓調査後、遺物出土状況	
		図版 4. 2号墓主体部、6号墳調査前	
		図版 5. 6号墳調査後、主体部	
		図版 6. 矢頭A区調査前、後	
		図版 7. 矢頭B区調査前、調査状況	
		図版 8. 矢頭B区住居跡	
		図版 9. 2号住居跡、5号住居跡	
		図版10. 住居跡切合部分	
		図版11. 横穴堆積状況	
		図版12. 横穴前景、遠景	
		図版13. 遺物 1	
		図版14. 遺物 2	
		図版15. 遺物 3	

## 図版目次

# I 経 過

## 1. 調査に至るいきさつ

島根県中央地区団体営畜産経営環境整備事業に伴い、昭和59年2月、事業主体である農業経済連合会（以下経済連）より、埋蔵文化財の調査が宍道町教育委員会に依頼された。町教育委員会では昭和59年2月島根県教育庁文化課主事松本岩雄氏の協力を得て、会場設置予定地であった大字白石字坂口約1.4haの分布調査を実施した。その結果、29基の古墳（水溜古墳群）が発見され、特にそのうちの1基は60mを越える前方後方墳であると確認されたため、分布調査の結果と、文化財保護の面からみて計画にあがった事業遂行は困難である旨を経済連に通知した。

その後、会場設置予定地は何ヶ所か検討されたが、同年6月、経済連より最初の予定地の北隣約1.4haでの分布調査の依頼が町教育委員会になされた。そこで町教育委員会では、県文化課の応援で現地の分布調査を実施したところ、5基の古墳と思われるものが確認され、その旨を経済連に通知した。

この5基の古墳の取り扱いをめぐって事業者は事業を計画どおり実施したい旨を、県、町教育委員会は文化財保護の必要性を説いたものの、最終的に宍道町教育委員会が埋蔵文化財に関する資料を得べく発掘調査を行なうこと、調査費用は経済連がもつことで合意した。

## 2. 調査の経過

調査期間を3ヶ月とし、9月11日より1号墳、2号、3号と尾根上の調査をしながら、一方では横穴確認のために、丘陵斜面にトレントを入れていった。当初2号古墳と考えていた墳丘が実は弥生時代の墓であったという新知見を得た他は順調に期間内の調査終了を予想していたが、11月になって突然丘陵斜面より横穴が発見され、また確認のために入れたトレントから多量の土師器片が出土し始めた。この時点で、期間での調査終了は無理との判断の下、町教育委員会は県文化課を交え、経済連との再度の協議を行い、調査の続行をはかった。

その後、住居跡、横穴、古墳の調査を行ない、昭和60年1月6日、全ての調査を終了した。この遺跡からは最終的に弥生墳墓1基、古墳2基、住居跡2群が確認されている。

## II 位置と歴史的環境

清水谷遺跡、矢頭遺跡は八束郡宍道町大字白石に所在する。この地点は宍道湖岸より南に約1.5 km入ったところで、西側は古くからの幹線（大原街道）が通り、現在は国道54号線となっている。南には松江一宍道をつなぐ広域農道がはしる。本遺跡は標高30m～60mの丘陵上、丘陵斜面に散在し、南側に続く古墳群と一連のものであろう。遺跡、古墳の大部分は付近の谷水田に面するものであるが、一部には北の宍道湖をのぞむものもある。

宍道町で現在確認されている最古の遺跡は縄文時代に遡り、縄文土器、石斧を出土する弘長寺遺跡<sup>注1</sup>、縄文土器を出土する三成遺跡<sup>注2</sup>、伊野谷遺跡の3ヶ所が知られる。

弥生時代の遺跡として、先にあげた三成遺跡より中期から後期にかけての甕形土器が、平田遺跡からも弥生土器が検出されている。なお、今回の調査により弥生時代後期の墳墓と住居跡が確認されたが、宍道町には広大な平野はみられないで、谷水田を中心とした小規模な集落が各地に散在し、生活を営んでいたのである。

古墳時代になると90近くの古墳及び横穴が知られており、その多くは来待川、同道川を中心とする河川域、宍道湖沿岸に集中する。まず古墳をみると、来待川の東に9基の古墳より成る松石古墳群<sup>注3</sup>、特異な石室を有する鏡北廻古墳があり、同道川流域には伊賀見1号墳<sup>注4</sup>、下の空古墳<sup>注5</sup>、椎山古墳群等が群在する。横穴では、松石古墳群に隣接する松石横穴群<sup>注6</sup>をはじめ、弘長寺横穴群、小松横穴群、栗尾山横穴群、菅原横穴群、才横穴群、佐倉末の廻横穴群など多数の横穴が分布する。ただ、現在までに宍道町では全域的分布調査が行なわれておらず、今回の発掘調査に先立つ分布調査で、約60mをはかる前方後方墳を含む29基の古墳群が新たに発見されたように、今後の調査で遺跡の数が増加することは充分考えられる。

律令時代になると『出雲國風土記』にその様相を知りうる。これによると現在の宍道町は健部郷、拜志郷の一部と宍道郷より成っており、今の宍道町字佐々布附近には宍道駅が置かれていたことが知られている。また猪石、犬石伝承で知られる宍道社（現在の石宮神社）をはじめ5社の記載を見る。



図1. 宍道町位置図

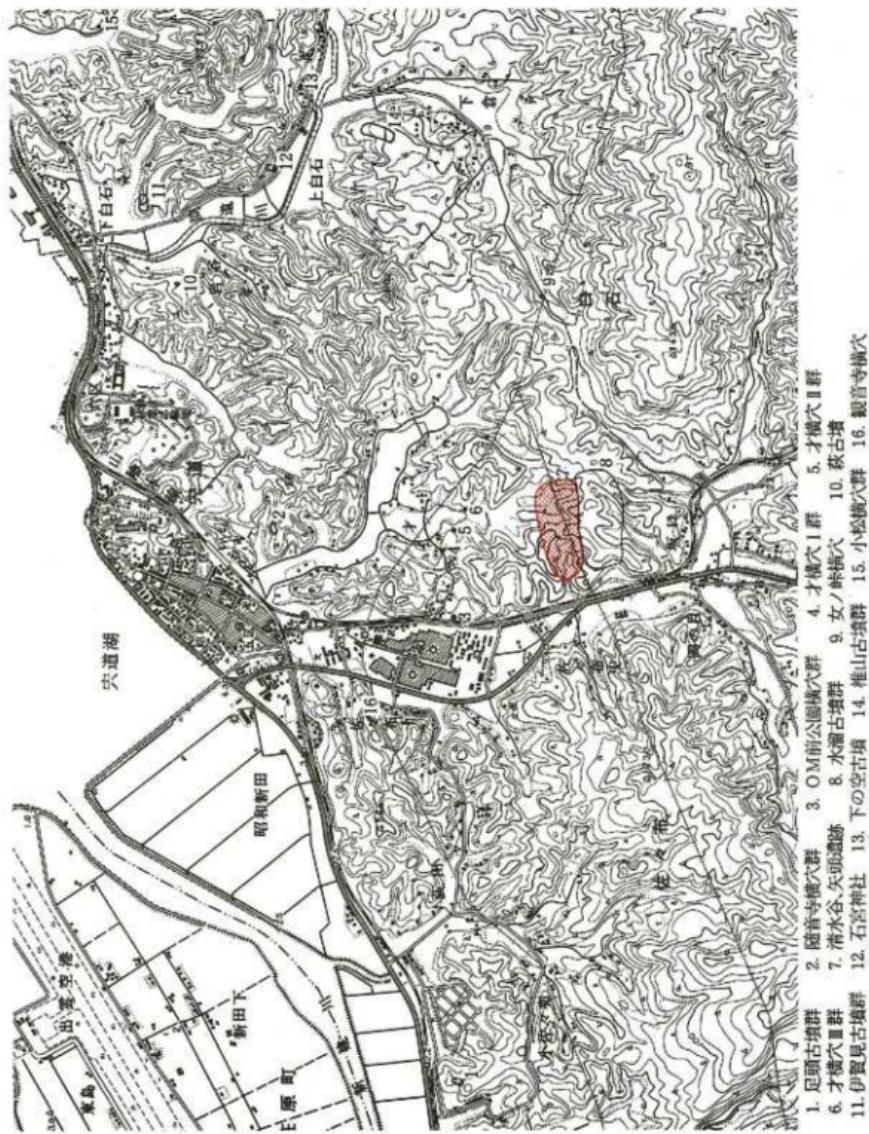


図2 清水谷遺跡、矢頭遺跡と周辺の遺跡 (1/25000)

### III 遺跡の概要

清水谷遺跡、矢頭遺跡は当初 5 基の古墳が小字清水谷を中心として確認されたため「清水谷古墳群」として発掘調査を開始したが、調査の進行に伴い 2 号墳と考えていた墳丘が弥生時代の墳墓であると確認され、次いで住居跡群が発見されたことにより名称の変更を行なった。この清水谷遺跡、矢頭遺跡からは弥生墳墓 1 基、古墳 2 基、横穴 1 基、住居跡 2 群が確認されている。

今回の発掘調査範囲内では 2 基の古墳が存在したが、この古墳の南に広がる丘陵上では 2~9 基からなる水溜古墳群が確認されており、広い範囲に分布する古墳群の一画を今回の調査対象としたわけである。水溜古墳群の中心に位置する 1~5 号墳は全長約 60 m をかかる前方後方墳と考えられ、従来の穴道の古墳文化を再考させうる材料であり、その周辺にある古墳の調査は貴重な資料を与えるものであった。

先に記したように分布調査の結果、5 基の古墳の存在が想定されたが、明らかに古墳と断定できるものは清水谷 1 号墳と調査中の踏査によって新たに発見された清水谷 6 号墳にとどまった。これは 2 号墳とした墳丘は弥生時代に溯源るものであり、3 号、4 号、5 号は古墳らしいマウンドは持つものの埋葬施設や遺物が発見されず、古墳と断定するに至らなかつたためである。

清水谷 1 号墳、6 号墳はともに水溜古墳群の分布する丘陵より派生し、互に隣接する舌状尾根の先端に位置する。1 号墳は標高 3.4 m、6 号墳はその南東 100 m、標高 5.4 m に位置し、1 号墳を見おろす形になる。2 号墳は 1 号墳の南西 80 m に位置し、標高 5.0 m をはかる。

以上の丘陵上の調査の外、横穴確認と遺構確認のために、丘陵斜面や平坦地にトレントを設定していったが最初は横穴や遺構らしきものは確認されなかった。ところが当初予定していた調査期間の終了まぎわになって横穴、住居跡が発見されたため、これら新遺跡を矢頭遺跡として発掘を継続した。

横穴は 1 号墳の北西 250 m に位置し、西に開く谷の奥部、標高 2.8 m に位置する。これは丘陵斜面に設定したトレントの一つから発見されたもので、横穴の周囲に広くトレントを設定したが、確認されたのは 1 穴にとどまった。住居跡は 1 号墳の南西 150 m に位置し、西に開く谷の奥部、標高 3.0 m より谷をはさんで向かい合う形で発見された。東側を A 区、西側を B 区と呼ぶことにすると、A 区より時期不明ながらも柱穴が確認され、B 区からは 6 棟の竪穴住居が確認されている。B 区の竪穴住居には切り合い関係がみられ、部分的で

はあるが住居の変遷を窺うことができた。

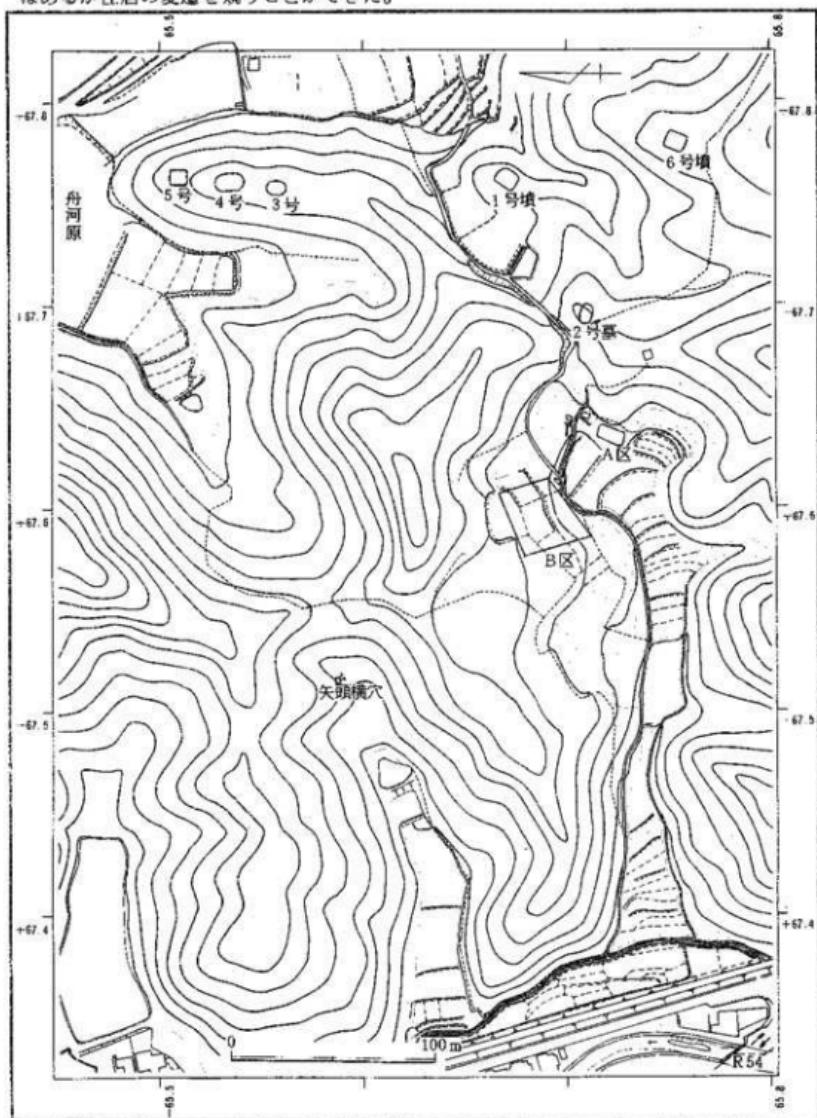


図3. 清水谷遺跡、矢頭遺跡位置図

## IV 清水谷遺跡

### 1号墳

本古墳は穴道総合運動公園の西側に広がる丘陵支群の一角にあたり、坂口地区と才地区の境より北東にのびる舌状丘陵の先端に位置する。古墳は丘陵平坦部では最も低位であり、標高3.4mを測り、主丘陵に向かって約70mさかのぼった地点には2号墓が続く。古墳

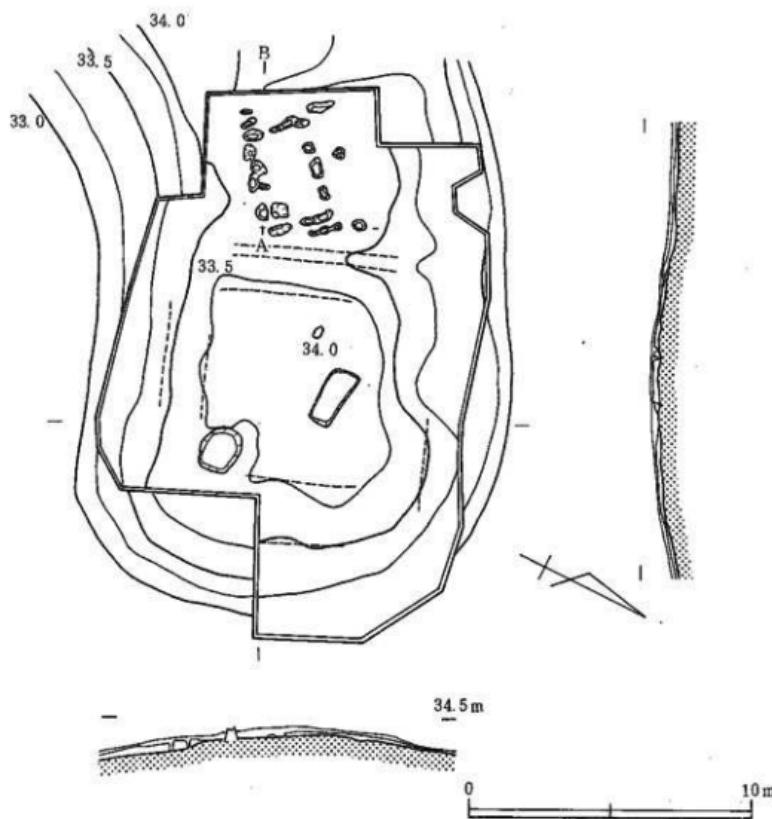


図4. 清水谷1号墳墳丘実測図

の周囲3方は急傾斜となり、舟河原よりのびる本谷に接する。このため、下方の谷水田よりの景観はきわだっているが、周囲の丘陵がさらに高いため、古墳から周囲の平野部はのぞめない。地形的に古墳が存在する予想はついたが、平坦面が細長く、古墳が2基あることも考えられた。調査の結果、一辺約10mの方形墳と建造物跡とも思われる土壙群が確認された。古墳は後世の流出が認められたが、古墳の中央を離れているものの主体部が検出され、表土中よりは須恵器片、土師器片が数片出土している。

#### 墳丘の構造

調査は、墳丘を四分するように土層観察用のあぜを設定し、墳丘の構造を解明すべく、順次掘り下げていった。その結果、墳丘は削平または流出を受けたと思われるが、高さ約0.8m、尾根軸に長さ10m、尾根軸に直交して長さ9.5mの規模をもつ方形墳であることが明らかになり、古墳に隣接した盛り上がりは建造物跡と考えられる土壙であろうと想定した。土層の観察によれば盛土は認められず、自然丘を利用して墳丘を削り出したものと思われる。墳頂部は比較的広い平坦面をもち、尾根軸に長さ6.5m、尾根軸に直交して6.5mを測る。古墳と土壙群の間には幅40cmの溝が認められるが、土壙群を穿つ時に古墳を削平したものと考えられる。

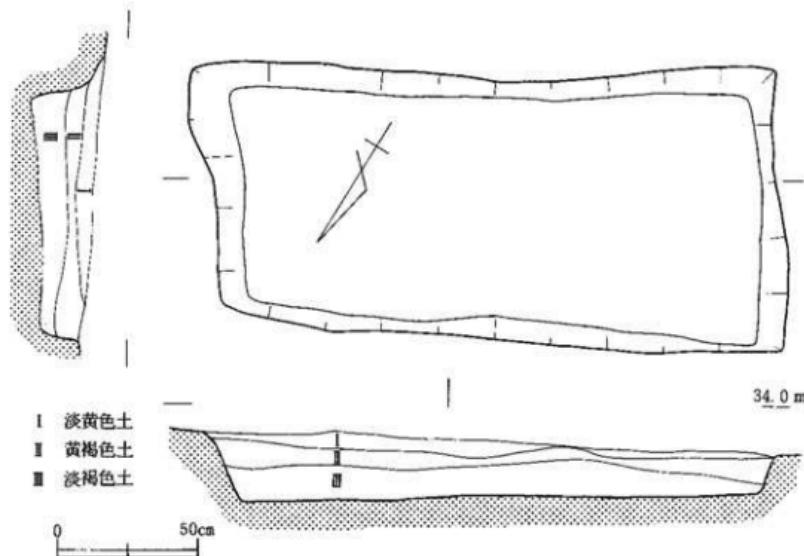


図5. 清水谷1号墳主体部実測図

## 埋葬施設

主体部は地山に直接掘り込み土壙内に木棺を設置したと考えられ、現存する墳丘の中心より北に偏り、主体部の主軸も古墳の主軸より傾き、N-31°-Eを測る。土壙の平面は整った長方形で長さ2m、幅0.9mで、底部は平坦に整えられている。主体部より遺物は検出されていない。墳丘の北東隅に長さ1.7m、幅1.3mの土壙が確認され、多数の木炭がみられているが不整形で土器片等は出土していない。

## 出土遺物

主体部からの遺物は確認できなかったが、墳丘、墳壠より点々と須恵器片、土師器片が出土した。遺物は破片になっており、器形を推定させるものは少なかったが、蓋、甕、壺の一部であろう。ただ、いずれも、墳丘に接するものではなく、古墳築造年代を決定するものではないが、山陰の須恵器編年Ⅱ期からⅣ期にかけてのものであり、古墳の年代も古墳時代後期のものと考えて大過ないと思われる。

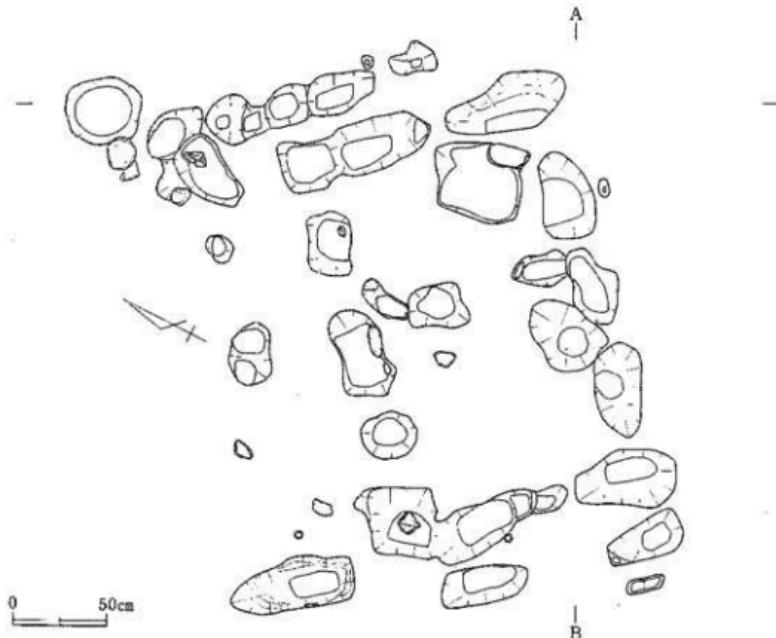


図6. 清水谷1号墳 西土壙群実測図

### 土 壤 群

1号墳に隣接しており、  
3・6の土壤が確認されて  
いる。大きさは一定では  
なく、最大のもので 1.1  
 $m \times 0.6 m$ 、深さ 0.8 m

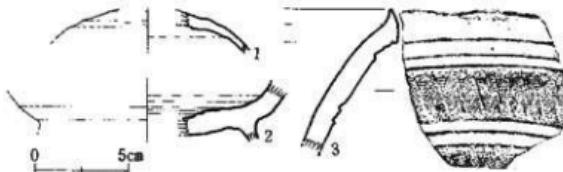


図7. 清水谷1号墳出土遺物実測図

をはかる。土壤群は全体として長方形に配されており、建物跡の可能性を残す。

### 2 号 墓

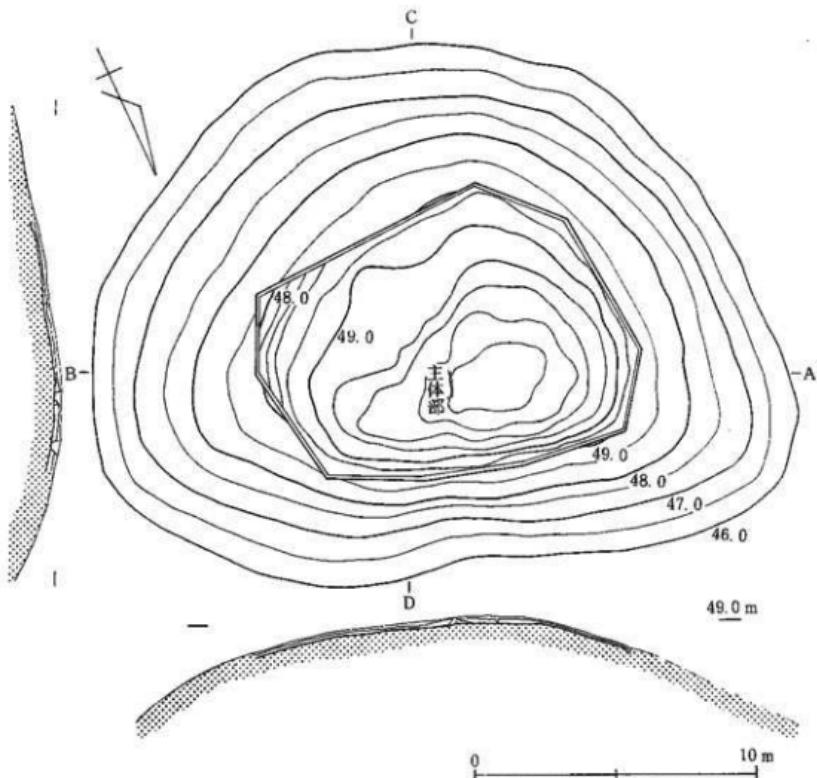


図8. 清水谷2号墓 墳丘実測図

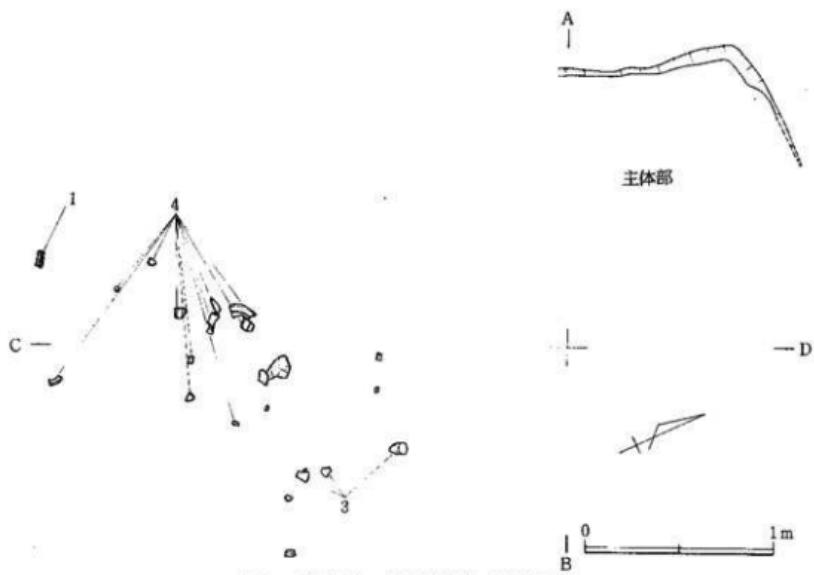


図9. 清水谷2号墓遺物出土状況図

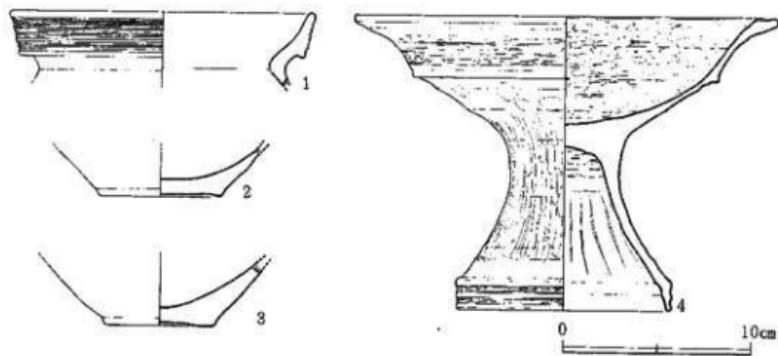


図10. 清水谷2号墓出土遺物実測図

1号墳の南西約70m、標高49.9mをはかる舌状丘陵の奥部に位置し、3号墳、4号墳、5号墳のある丘陵に隣接する。地形的には主丘陵から分断され、独立した高まりをもっているが、主丘陵との間を通る山道のためと思われ、旧状は今より主丘陵に接続していたものと思われる。2号墳の西侧と東側の斜面は下方に街道の通る急斜面であるが、北側、東側は自然地形でありながら急斜面となっており、1号墳との比高差は19mを測る。

当初1号墳に続く2号墳と考えていたが、調査の結果、弥生時代の墳墓であることが判明し2号墓とした。

#### 墳丘の構造

分布調査を行なった時点では不整形ながらも円墳と考えていたが、地形測量を行なったところ、不整形な墳形を呈し、かなりの墳丘の流出が予想された。比較的原形をとどめると思われる地点に土層観察用のあぜを設定し、調査を開始した。

調査が進むにつれ、予想以上に地山が軟質であり、遺物も発見されなかったため遺構の流出、あるいは自然地形の可能性も考えられたが、墳丘南側裾を調査したところ弥生土器片が検出された。この土器群は、主体部が南側に流出していることより、もともと主体部上にあった土器が地山の流出にともない流れ出たものと推定される。土層の観察によると盛土の形跡はみあたらない。2号墓が墳丘をもつとすれば自然地形を削り出したもので、明確な裾部をもたない橢円形であるため、墳丘の規模は判然としない。土器片出土地点と主体部の比高差は約0.8mを測る。

#### 埋葬施設

主体部の大半は流出し、南西側の一隅を残すのみで、深さ17cmを測る。規模は判明しないが、東西に主軸をもつものであろう。遺物、内部施設については不明である。弥生墓の性格上、複数の墓壙の存在が想定されたが、確認された埋葬施設は頂部や裾部を含めて1つにとどまった。

#### 出土遺物

主体部より遺物を確認することはできなかったが、墳丘南側裾より弥生土器片が出土した。これらは地表下約0.3mのほぼ同一レベルより採集されている。復元したところ高坪、變の口縁、底部が確認されているが、いずれも同一時期に属し、弥生時代後期の所産であろう。

#### (3号墳)

(3号墳)は1号墳、2号墓の位置する丘陵に隣接し、4号、5号と続く。表面観察では古墳状のマウンドをもっていたが、発掘調査を行なったところでは遺物も主体部も確認されず、古墳と断定するに至らなかった。

#### (4号墳)

(3号墳)より約15m北に位置する。これも表面観察では幅の狭い尾根上に築造された古墳と思われたが、発掘を行なった範囲内では遺物、遺構の検出はなかった。ただ、調査区の南側で不自然な溝状のものが見つかっている。

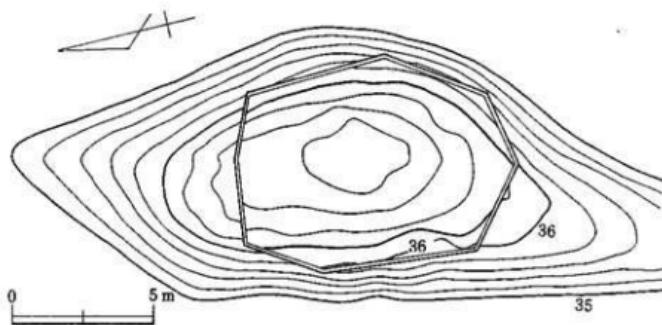


図11. 清水谷（3号墳）実測図

（5号墳）

（4号墳）の北約20mに位置するもので、3号、4号と同様に古墳を想定して調査を

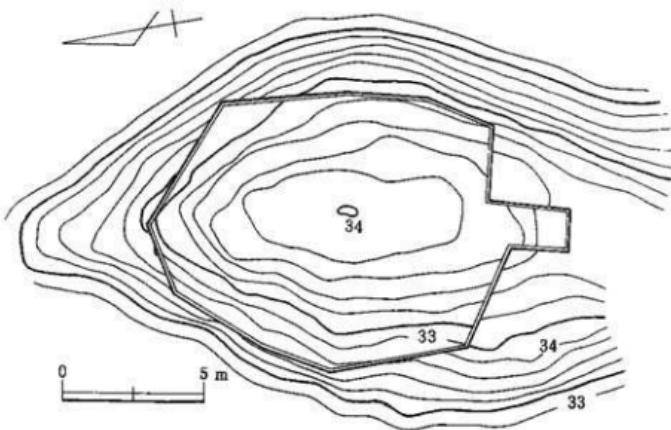


図12. 清水谷（4号墳）実測図

進めたが、遺物、遺構の確認はできなかった。この3、4、5号の存在する丘陵は瘦尾根であるうえに、地質的には砂岩質のために墳丘の流出も考えられる。一方、丘陵斜面よりは横穴、遺物等は確認されていない。

## 6号墳

本古墳は1号墳、2号墓のある丘陵に隣接し、谷に向かって延びる舌状丘陵の奥部に位置する。古墳の立地する地点は比較的ゆるやかな傾斜をもつ丘陵で、幅12~15mの平坦面が延び、標高54.50mを測る。西隣の丘陵に立地する1号墳は約100m隔たっているが、1号墳との比高差は20m近くあり、6号墳より見おろす形になる。1号墳、2号墓がその立地より丘陵端に延びる谷水田しかのぞめなかったのに対し、6号墳はその立地と標高のために、谷水田はもとより穴道の集落、穴道湖をのぞむことができる。本古墳の南側一帯には、発掘調査に先だつ分布調査で明らかになった水溜古墳群約30基が散在しており、清水谷1号墳も含め、大古墳群の中の一つといえよう。発掘前の段階より明らかに方形墳と確認でき、清水谷古墳群の中では最も整美なものであった。

### 墳丘の構造

調査は土層觀察用のあぜを尾根軸に沿って1本とそれに直交して1本設定したうえで、順次掘り下げていった。その結果、古墳は盛土をともなわず、地山を削り出して形づくった方形墳であると判明した。規模は尾根軸に1.2m、尾根軸に直交して1.0mをはかり、裾部からの高さは0.6mを測る。墳丘南西斜面は丘陵に溝を掘り込み、墳形を整えるが墳丘北東斜面は先細りの尾根に位置するため、やや丸味をおびた墳形となる。北西側と南東側の斜面は谷に向かって単調に下るため、裾部の確認ができなかった。

### 埋葬施設

墳丘の中央に位置しており、主軸をN-3°-Wに向けて1基掘り込まれている。平面形は整然としたものではないが、ほぼ長方形を呈している。規模は長さ2.1m、南側上幅0.7m、南側下幅0.6m、深さ0.28mで底部は平坦に整えられている。主体部内より遺物は出土していない。

### 出土遺物

主体部よりは出土していないが墳裾より須恵器片と土師器片が確認された。どの遺物も破片であったが、東側裾部より出土した土師器片が唯ひとつ高坏の脚部としての原形をとどめるものであった。この高坏片をもって6号墳の年代を決定するのは困難であるが、器形は不明ながらも須恵器片が一片出土しているので、古墳時代中期から後期にかけての築造であろう。1号墳が比較的多くの須恵器片を出土したのに対し、この古墳ではほとんどみられなかつたことや、高坏の形態より1号墳に先行するものと考えられる。

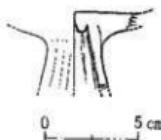


図13. 清水谷6号墳出土遺物実測図

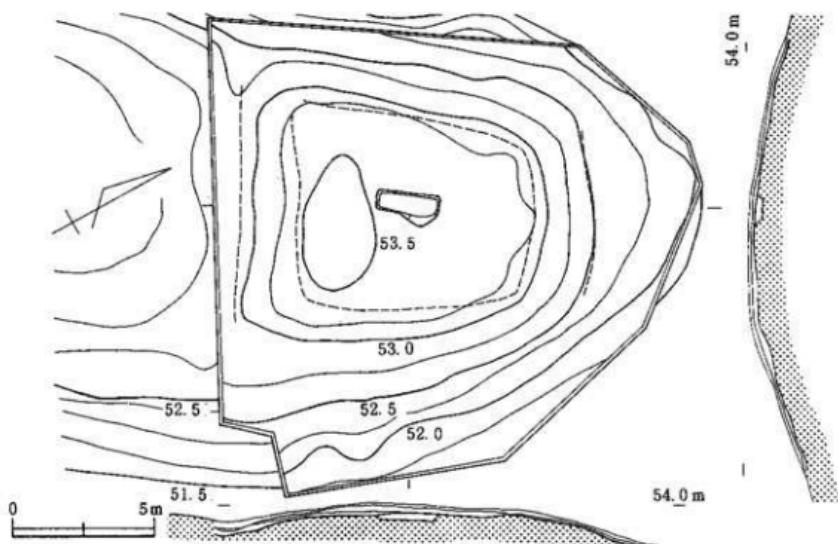


図14. 清水谷6号墳墳丘実測図

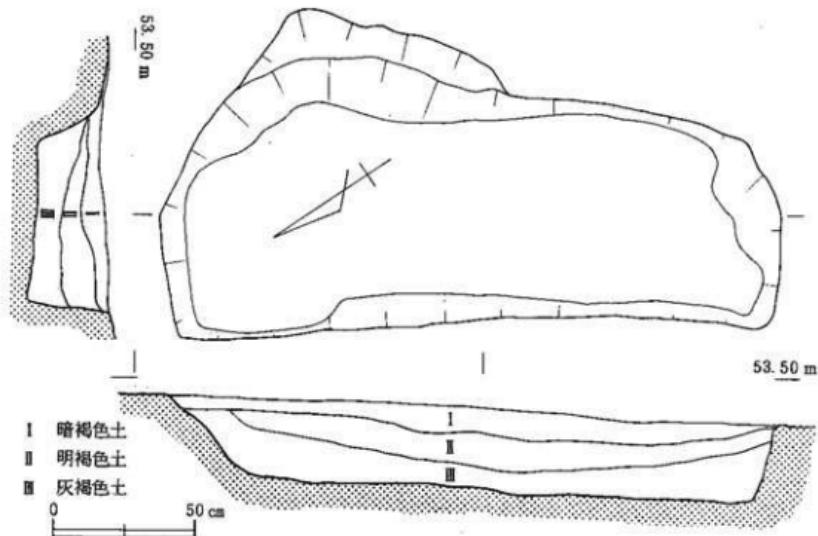


図15. 清水谷6号墳主体部実測図

## V 矢頭遺跡



図16. 矢頭遺跡位置図

矢頭遺跡は清水谷遺跡の調査中に発見された遺跡で2群の住居跡と横穴からなる。住居跡は矢頭と呼ばれる谷の奥部に位置し、向かい合う形で2箇所で発見されており、南側をA区、北側をB区とする。A区からは掘立柱建物とピット群が検出され、B区からは弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が検出されている。このA区の南西隣にある舌状尾根は、その先端より向かいの谷に矢を射たという伝承をもち、矢頭という地名の由来となっており、古来、鉄器などが出土したと伝えられる。そこで工事範囲の試掘調査を行なったが何も出土しなかった。

横穴は矢頭谷に北隣する谷に位置する。丘陵斜面に設定したトレンチから発見されたもので単独で存在する。すでに盜掘を受けており、横穴の周囲に遺物が散在していた。

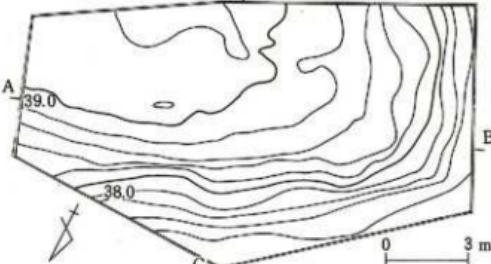


図17. 矢頭遺跡A区地形測量図

## A 区

試掘の段階で表土中より陶磁器に混じりながら須恵器が出土し始めた。そこで調査範囲を拡張し、削平予定地の発掘を行なった。

その結果、掘立柱建物の一部と柱穴状ピットが確認されている。建物の大部分は削平予定地外のため全容を知りえないが、柱間距離は 190 cm をばかり、柱穴は暗褐色の單層である。遺物は表土中より須恵器片、土師器が出土していたが、地山に近くにつれて少なくなっていることから、遺跡の南側からの流れ込んだ可能性も強い。

## B 区

A、B、C とトレーニチを設定し、試掘を進めていった。A、B トレーニチでは少量の土器片が出土するにとどまったが、トレーニチの試掘を行なったところ、土師器と須恵器の包含層が確認された。そこで遺跡の範囲確認を行なった結果、C、D ト

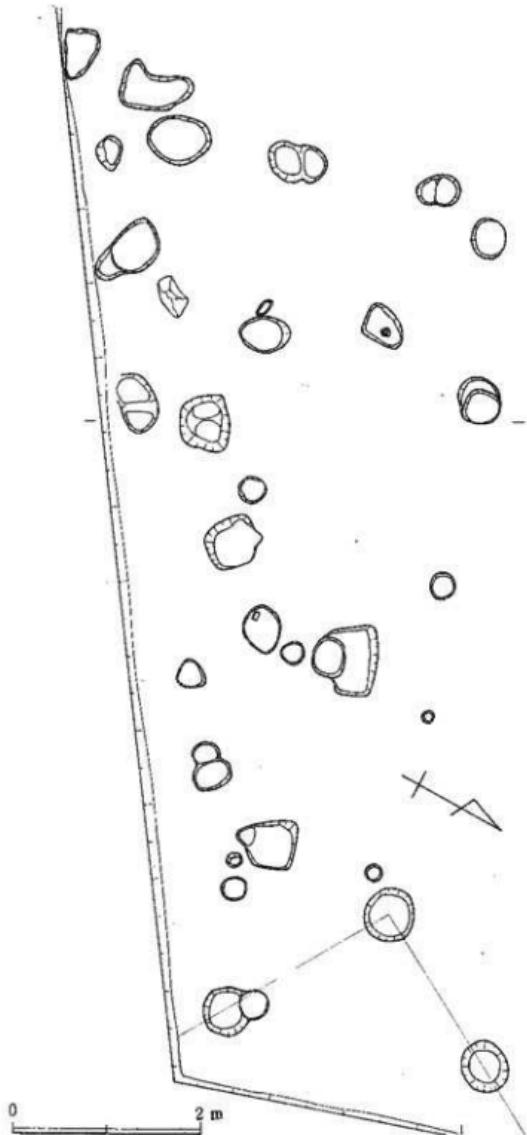


図18. 矢頭遺跡 A 区 平面図

レンチの遺物出土量が特に多いことが判明した。D、K～N レンチからは何ら出土していない。

遺物包含層をもつレンチはそれぞれ拡張したが、C レンチ周囲からは 6 棟の住居跡が、J レンチからは加工壇が確認されている。

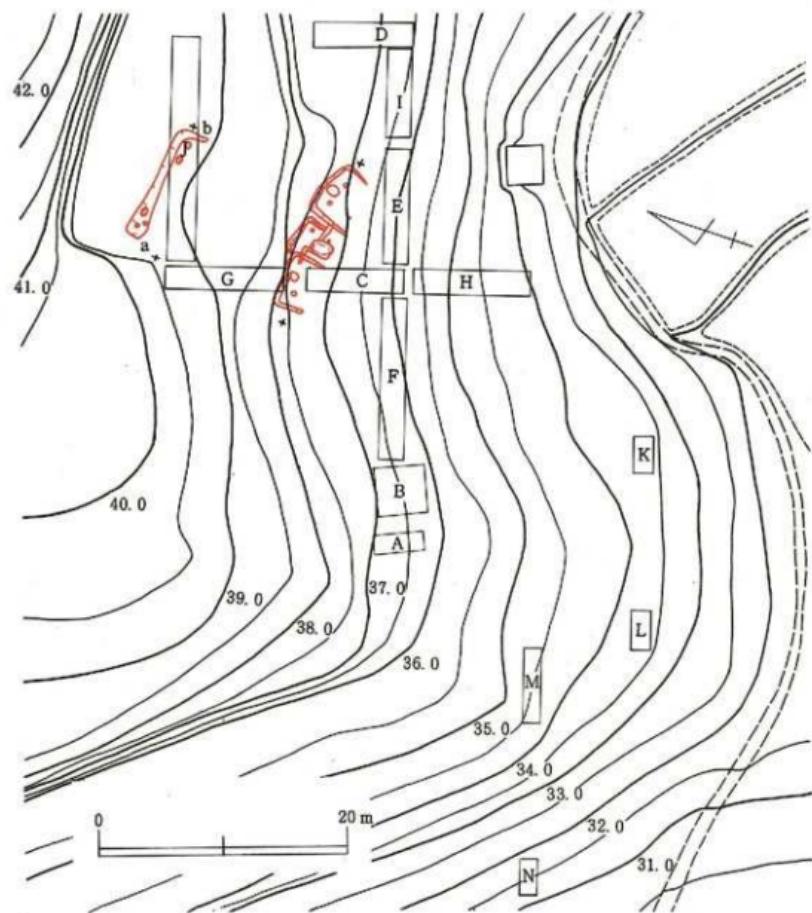


図 19. 矢頭遺跡 B 区地形測量図

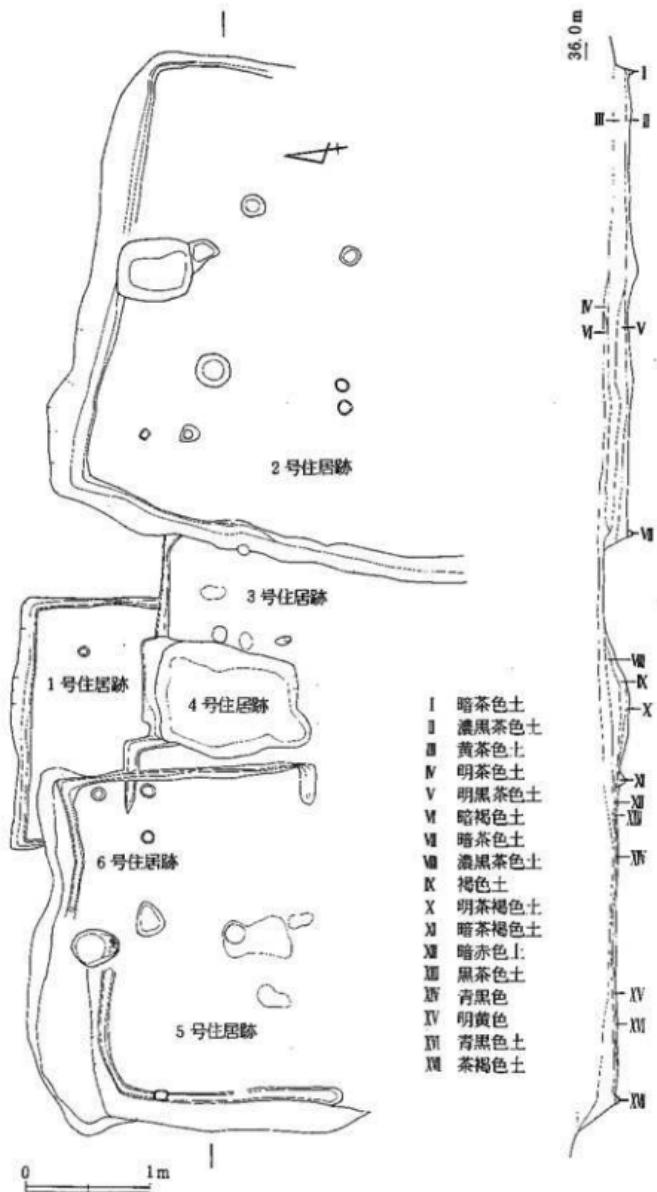


図20. B区住居跡配置図

### 1号住居跡

1号住居跡は3、4、5、6号住居跡に切断されており、北側の一辺と西側辺の一部を残すのみである。残存部をみると方形プランを示し、北壁で4.0mを測る。東壁は2.2mを残すものの、住居跡の $\frac{2}{3}$ を失っていることになる。

この住居跡は傾斜をもつ地山に直接掘り込まれたもので、北側の壁高は40cmを測る。残存する床面の周囲には幅10cm~15cm、深さ5cm~10cmの側溝がめぐっている。北東側の隅には幅20cm、深さ30cmの柱穴と思われるピットが確認されているが、他にはピット状のものは確認できず、他の住居によって切り取られたものと思われる。

遺物はあまり出土していないが、北壁に近い地点と、北側溝より数点出土している。これらは1号住居跡に伴うものと思われ、弥生後期の特徴をもつ。B区の他の住居跡から弥生時代の土器が出土していないことや、他の住居跡によつて切断されていることより、1号住居跡が最も古いものと言えよう。

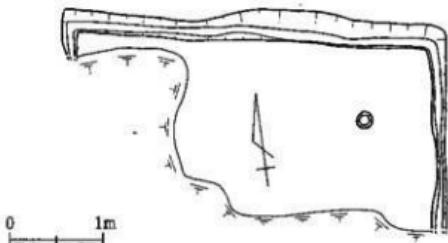


図21. B区1号住居跡実測図

### 2号住居跡

隣接する3号住居の大半を壊して作られたもので、B区のなかでは最も遺存状態が良い住居跡である。南側の壁は他の住居跡と同様、切り取られていたが残存部より住居跡の規模がうかがえる。

平面プランは方形で、傾斜した地山に掘り込んだものである。北壁は上辺7.4m、下辺6.8mをはかり、東壁下辺は2.0m、西壁下辺は6.2mを残す。側溝は幅10cm~20cm、深さ5cm~10cmを測り、床面の周囲をめぐる。側溝内に小形のピットがみられる。

床面はほぼ水平でピットが掘り込まれている。 $P_1$ は上径52cm、底径30cm、 $P_2$ は上径36cm、底径20cmを測り、その配置と規模からして主柱穴と思われるが、対する主柱

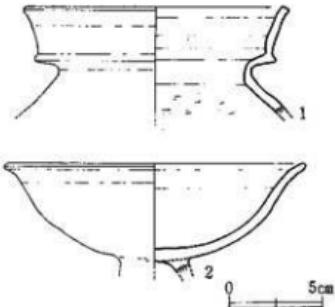


図22. B区1号住居跡出土遺物実測図

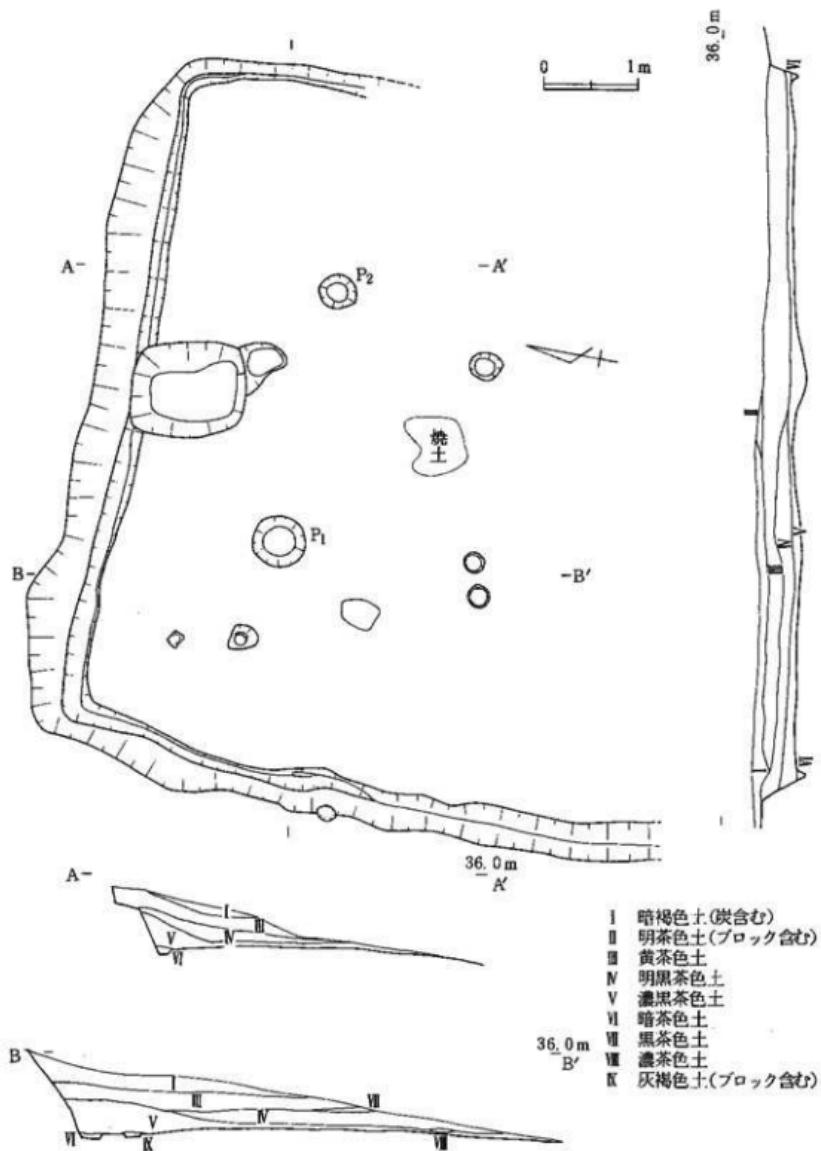


図 23. 矢頭遺跡 2号住居跡実測図

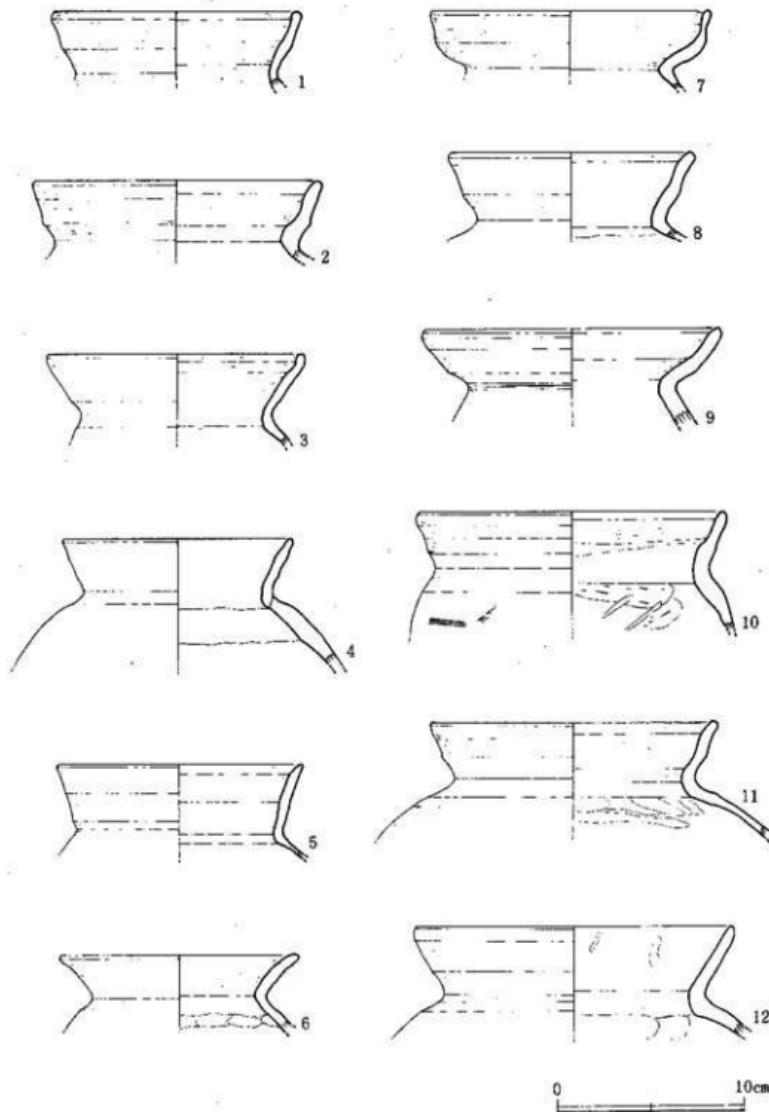


图 24. B 区 2 号住居跡出土遺物実測図 - 1

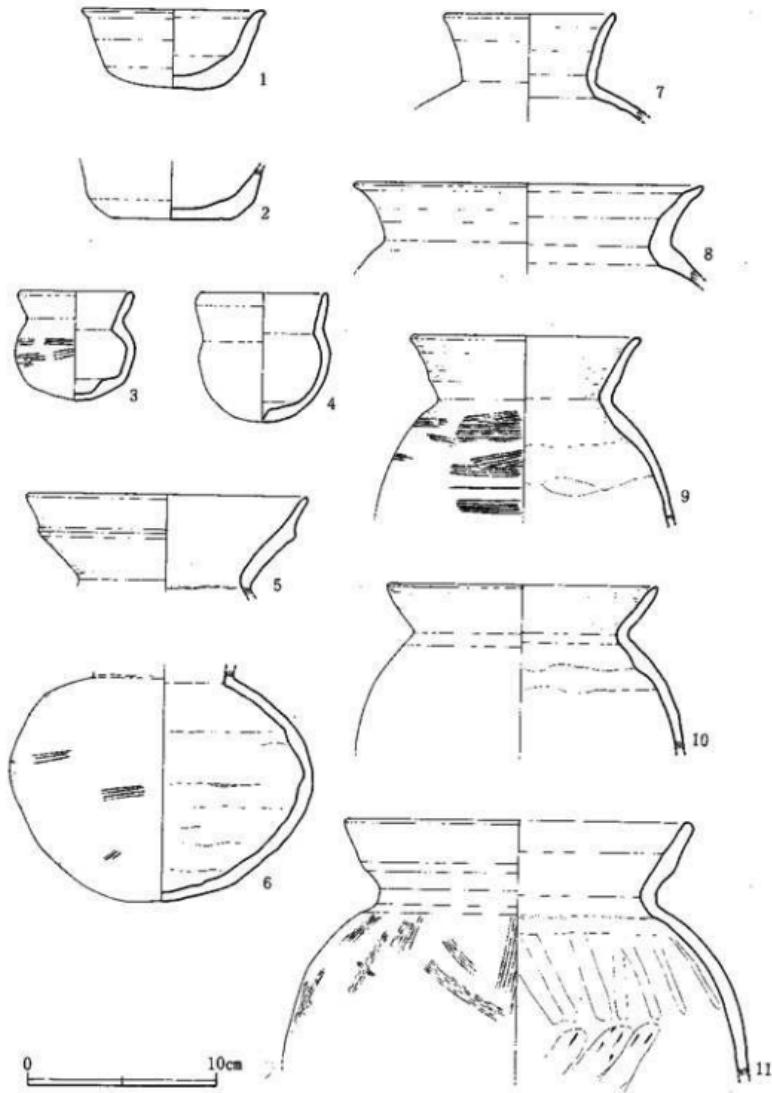


図 25. B 区 2 号住居跡出土遺物実測図 - 2

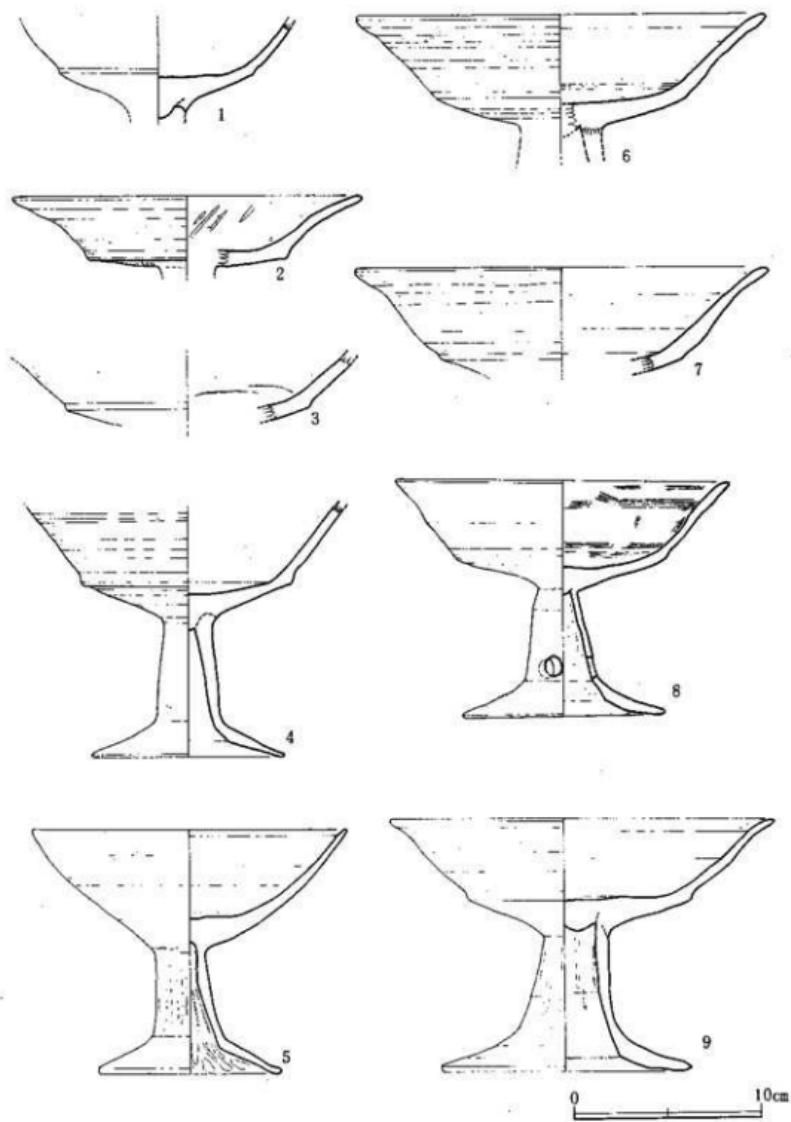


图 26. B 区 2 号住居跡出土遺物実測図 - 3

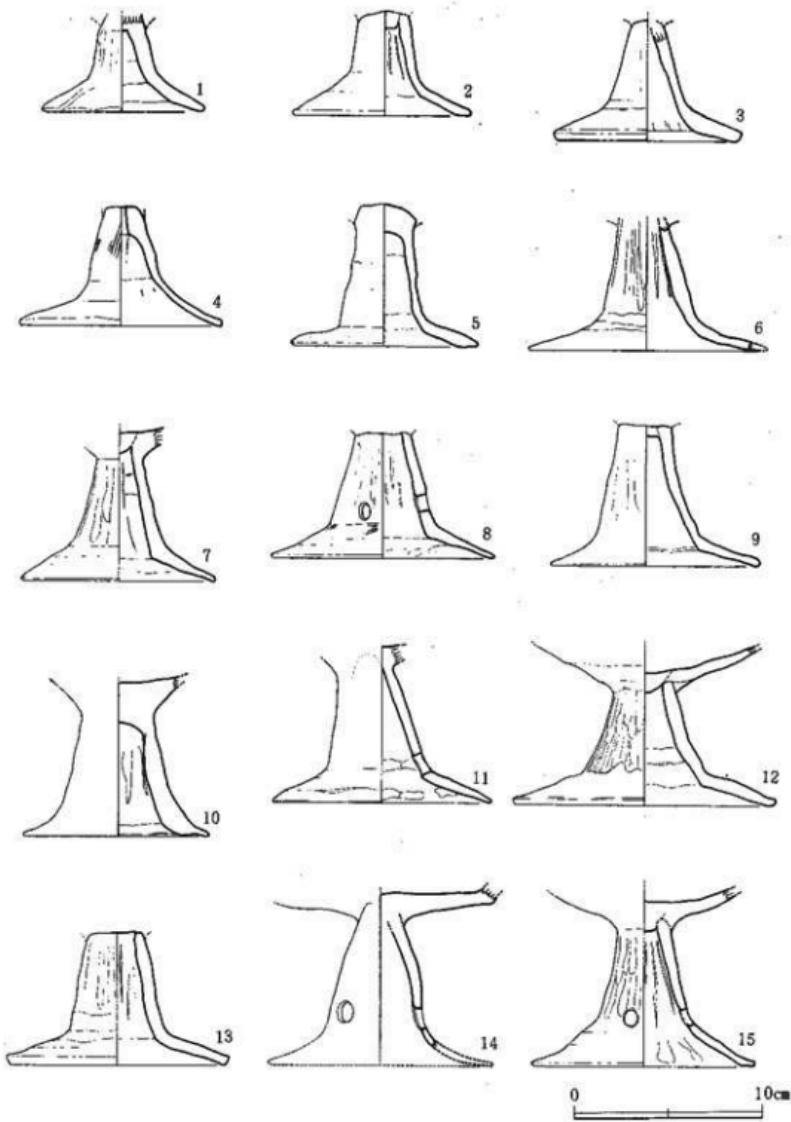


図 27. B区 2号住居跡出土遺物実測図 - 4

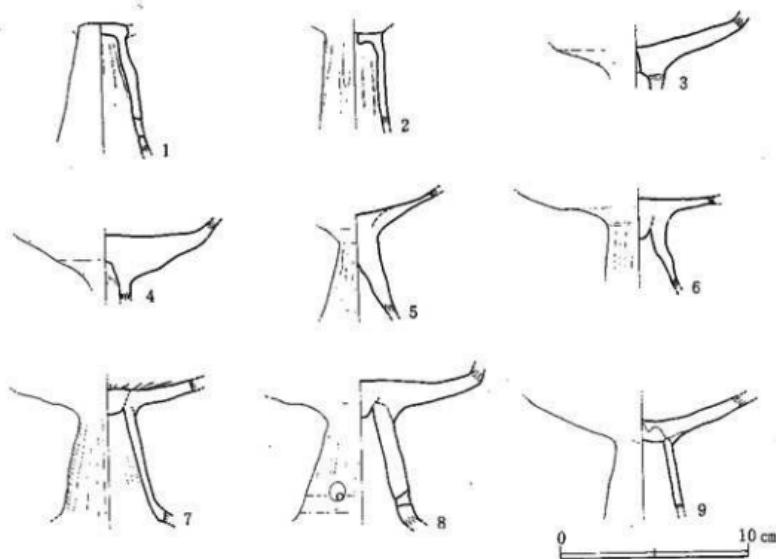


図28. B区2号住居跡出土遺物実測図-5

穴の検出はできなかった。 $P_1 \sim P_2$ は2.4 mである。北壁に接して上縁1.2 m×1.0 m、下縁0.9 m×0.6 m、深さ9.4 mの土壌と、それに接して幅0.4 m、深さ0.3 mの土壌が掘り込まれているが貯蔵穴と思われる。中央部には60 cm×60 cmの範囲で焼土がみられる。

2号住居跡からは多くの土師器が出土している。特に壺形土器と高壺が多く、壺形土器には複合口縁のなごりをとどめるものと単純口縁のものの両方が含まれている。この土師器群は古墳時代中期の特徴をもつものであるが、須恵器が一片も伴出しないことより、須恵器搬入直前の土器群であろう。

### 3号住居跡

3号住居跡は2号、3号住居によって切り取られ、住居北の一部を残すのみである。幅15 cm～20 cm、深さ10 cmの測溝が北壁に沿って走る。柱穴の状態は判然としないが、4号住居跡に接して幅24 cm、深さ20 cmのビットがみられ、3号住居に伴うものだろう。床面には2ヶ所の焼土面がみられ、26 cm×26 cmと41 cm×24 cmを測る。3号住居に伴う遺物は検出されていない。

#### 4号住居跡

4号住居跡は1号住居跡と3号住居跡を切り取るが、測構やピットはみられず、プランも不整形であるので、住居跡ではなく住居に伴う付属施設あるいは貯蔵穴のようなものとも考えられる。残存する部分は南北に2m、東西に1.4mで、深さは3号住居跡の床面より40cm、1号住居の床面より50cmを測る。

遺物として土師器の壺形土器、甕形土器、高坏が出土している。壺形土器は単純に外に開く口縁をもち、甕形土器も単純口縁である。高坏は坏部に明瞭な段を有するものと同時期のものであろう。須恵器は出土しておらず、土師器の形態をみると古墳時代中期のものと言えよう。

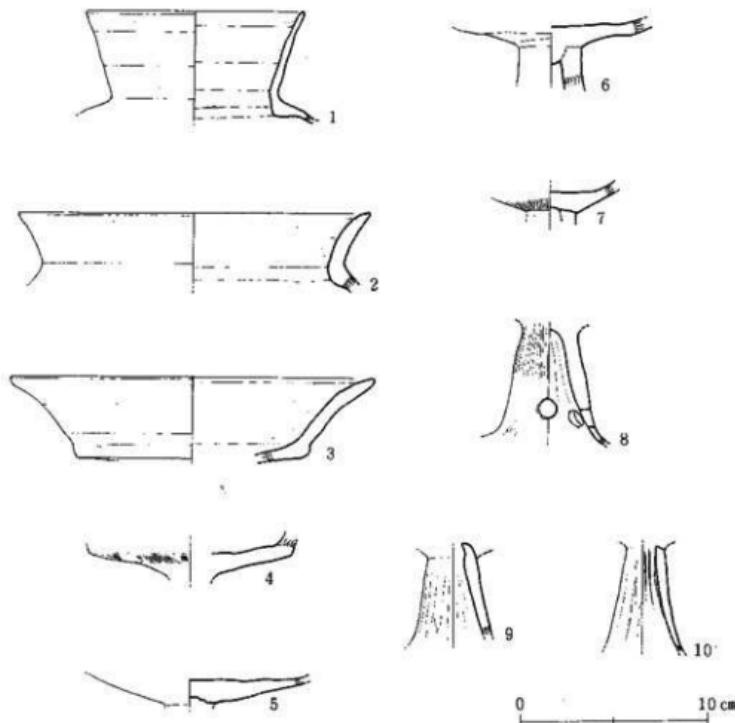


図29. B区4号住居跡出土遺物実測図

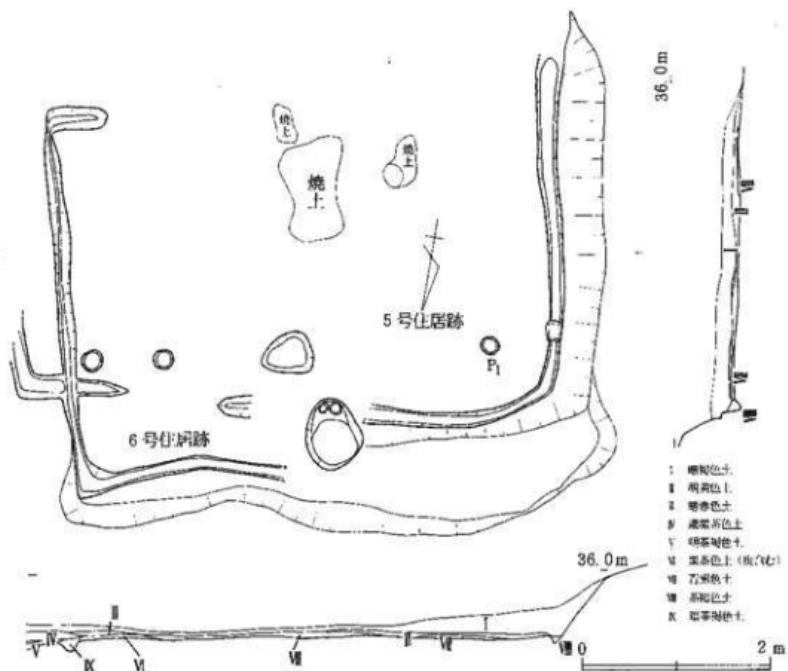


図30. B区5、6号住居跡実測図

### 5号住居跡

5号住居跡はB区で発見された住居跡群の最西部に位置し、6号住居跡上に重なる格好で検出された。壁面は北西のコーナーから南に向かって残されているが、大部分は失われている。東側は壁を残さないものの、側溝が残っており、住居の規模が窺える。それによると北壁部分で5.8m、西壁残存部4.0m、東側で側溝残存部0.4mをはかる。地山斜面に直接掘り込まれたもので、南側は壁も側溝も残さないが、北側の2隅をみるとかぎり、方形プランの住居跡といえよう。西壁高はコーナー部分で約0.7mを測るので、他の壁もほぼ同じような高さをもっていたものと考えられる。

側溝は幅10cm~20cm、深さ5cm~10cmを測り西壁から東壁にかけて、ほぼ半分が残る。

5号住居に伴うと思われるピットは確認されているが、P<sub>1</sub>が主柱穴と思われる以外は判然としない。北壁中央部には上縁6.0cm×5.0cm、下縁4.0cm×3.0cm、深さ3.3cmのピ

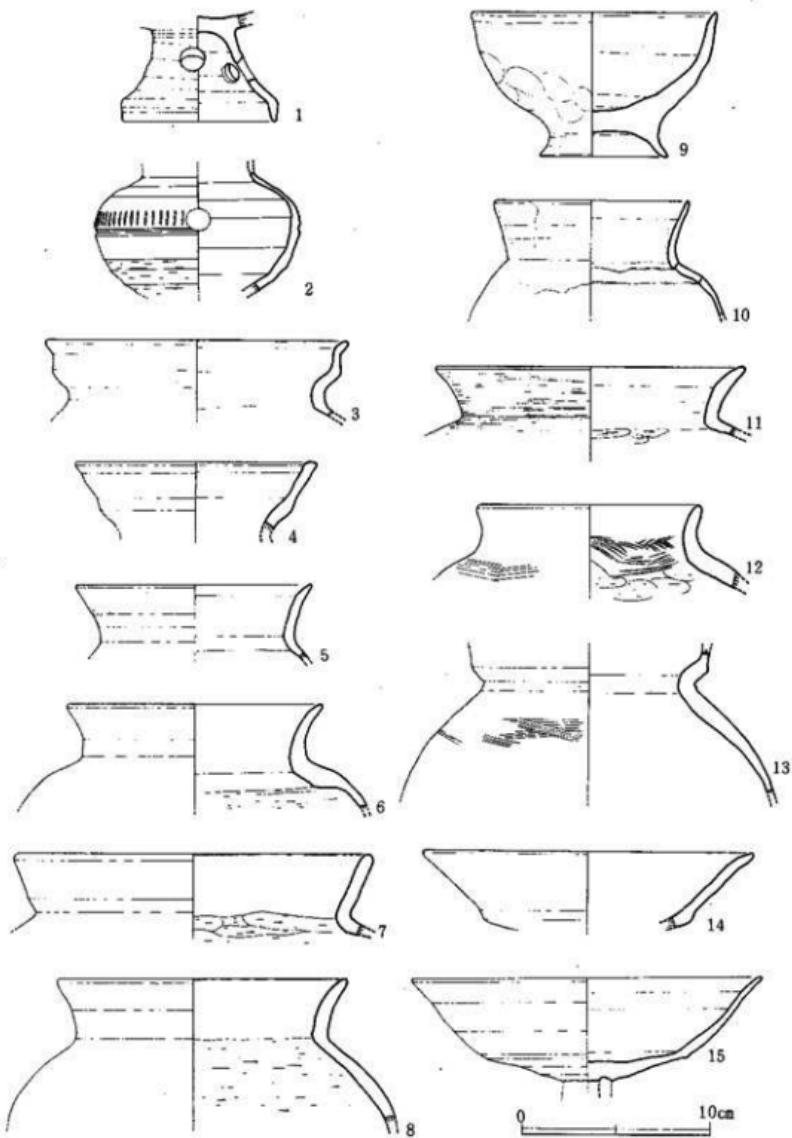


図31 B区5号住居跡出土遺物実測図-1

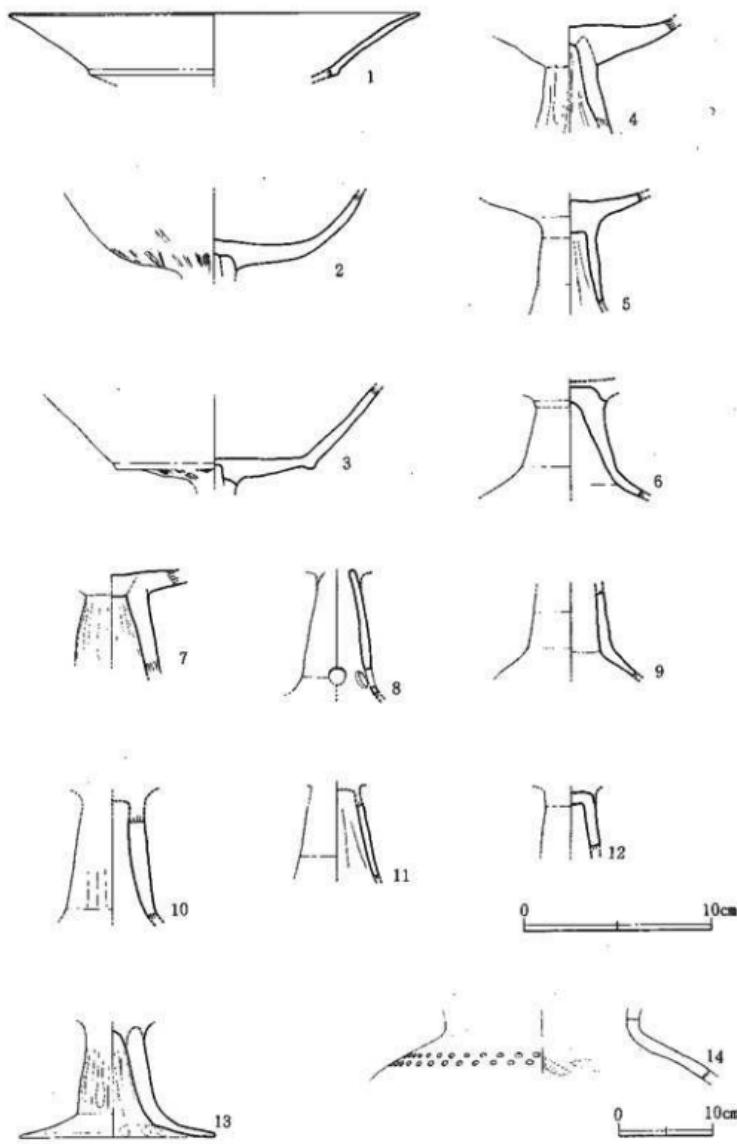


图 32. B 区 5 号住居跡出土遺物実測図 - 2

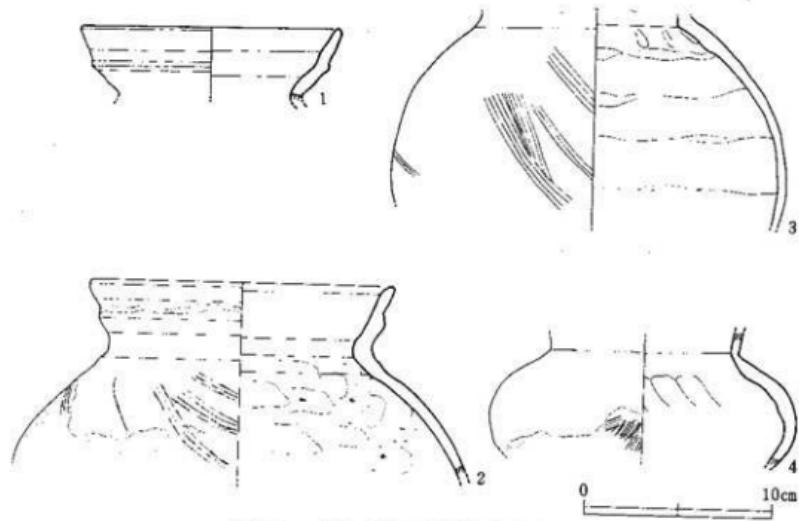


図33. B区6号住居跡出土遺物実測図

ットが確認されるが、柱穴と考えるより貯蔵穴のようなものを考えたい。

床面には2ヶ所の焼土面を残す。一方は $1\text{m} \times 0.6\text{m}$ の長方形状のもので、他の方は $0.5\text{m} \times 0.3\text{m}$ を測る。この2つの焼土面は暗赤色であるが、その中に直径30cmほど  
の黒灰色の円形焼土面をもつ。この円形焼土面が竈の中心部であるとすると、南側に向かって竈の口が開いていたと考えられる。

遺物として須恵器と土師器が伴出する。須恵器は高壺の脚部と竈の脚部が出土しているが、これらは山陰の須恵器編年Ⅰ期からⅡ期に相当し、和泉陶邑古窯跡群編年のⅠ型式5段階に相当すると考えられる。土師器は壺、壺、甕、高壺が出土する。土師器の甕は二重口縁の退化したものと単純口縁が伴出し、高壺は壺部に段を持つものと持たないものが伴出する。これらの遺物はいずれも古墳時代中期に比定でき、2号住居跡出土遺物とはほぼ同時期のものと考えられる。

#### 6号住居跡

5号住居跡に先立って建てられたものであるが、床面はほぼ同一レベルである。このため不注意にも6号住居の存在に気付かず、一部遺物の混乱をおこした。図33、34で5、6号住居跡出土遺物としたのはそのためである。

さて、6号住居の規模は2つの隅をもつ側溝によって知り得る。それによると南北に4

mを測り、方形プランの床面をもつ。側溝は幅10cmから20cm、深さ5cmから10cmを測る。 $P_2$ が6号住居跡の一つの柱穴であろうが、他のものについては検出できなかつた。北壁中央部に上縁0.8m×0.6m、下縁0.5m×0.5mのビットをもつが、貯蔵穴と考えられる。先に5号住居跡に伴うとした貯蔵穴も6号住居に伴う可能性もある。

遺物は土師器の甕である。いずれも退化した二重口縁をもつ。遺構の切り合い関係より6号住居は明らかに5号住居に先行するが、土器の特徴からみて、古墳時代中期に相当すると考えられる。2号住居、4号住居、5号住居、6号住居は併行して存在したという確証はないが、ほぼ同時期の住居跡といえよう。

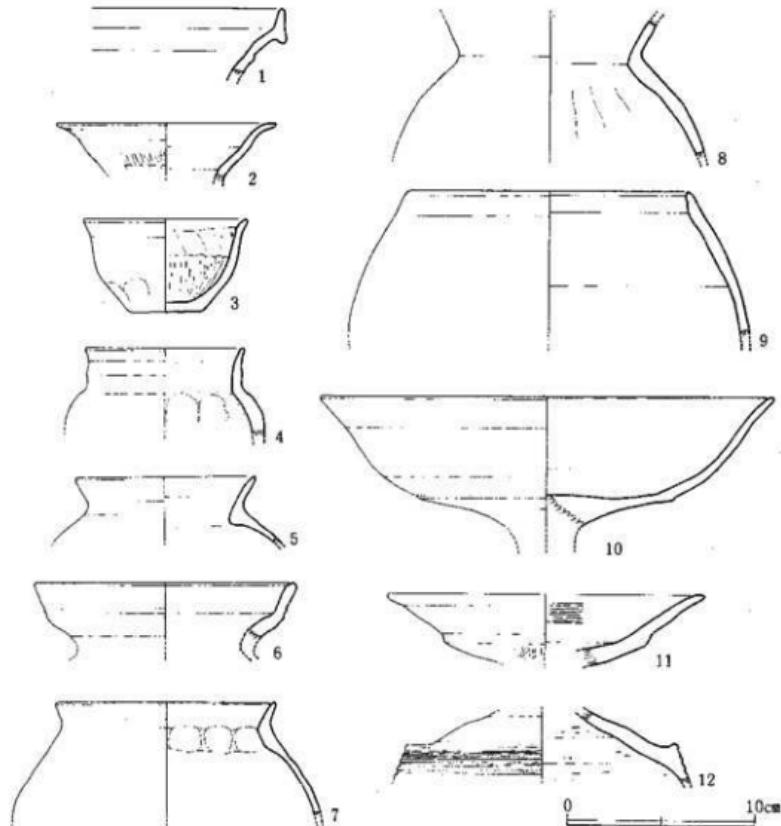


図34. B区5、6号住居跡出土遺物実測図-1

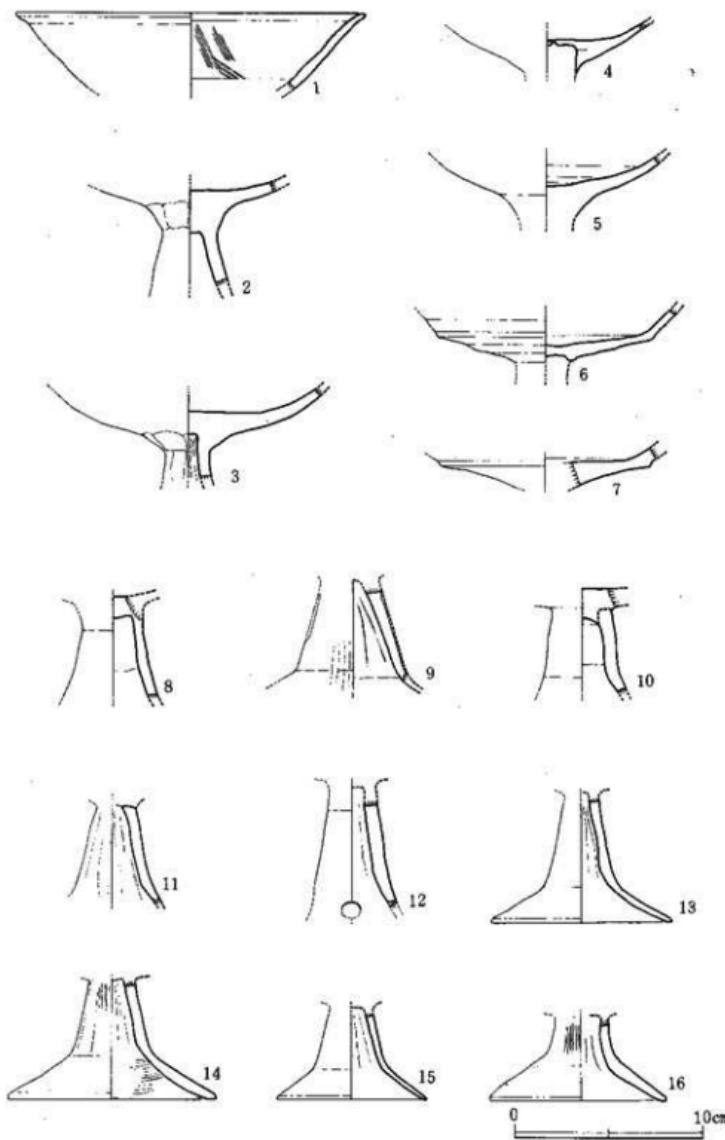


図 35. B 区 5、6 号住居跡出土遺物実測図 - 2

### 加工壙状遺構( J レンチ )

1号～6号住居跡の北約10mに位置し、長さ10mにわたって約50cmの高さをもつ段となっている。西側は直約的に高低差が消えていき、東側は内湾しながら3mほど南に延びて高低差が消える。これは地山に直接掘り込まれたもので掘り込まれた部分には7ヶ所のピットが見つかっている。この遺構を中心に周辺よりも土器が出土しているが、明らかに加工をうけた部分は1ヶ所にとどまった。性格は不明である。

遺物は遺構の周囲から出土するものの遺構にともなうものは図36に示すにとどまった。須恵器、土師器が併出している。須恵器の一つは新しい様相を示すが、他の2つは古式の須恵器であり、土師器は単純口縁をもつ甕と高杯である。これらの遺物はこの須恵器を除き、古墳時代中期から後期にかけての特徴をもち、遺構もその時期のもので、1～6号住居跡に後出するものといえよう。

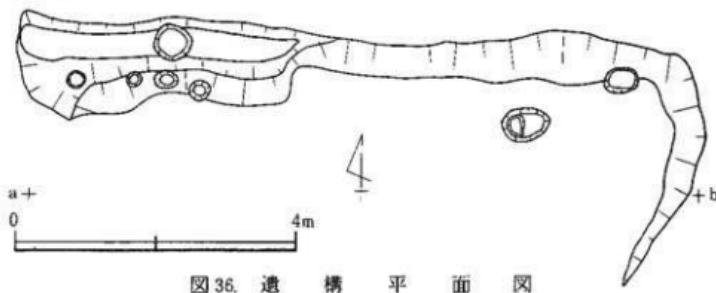


図36. 遺構平面図

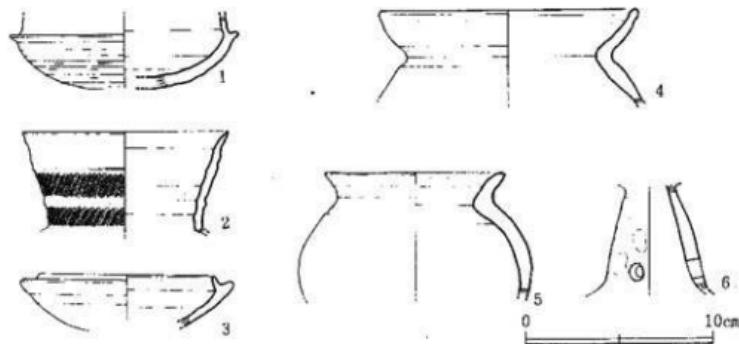


図37. 出土遺物実測図

## 矢頭横穴

丘陵斜面にトレンチを設定し、横穴の確認に努めたが、発見されたものは1基にとどまつた。この発見地は地元で延の木谷と呼ぶ谷間で、1号墳の北西約250m、標高28mに位置する。最初、横穴の下方約4mより須恵器片が出土したので、横穴群を想定して出土地周辺にトレンチを設定して確認に努めた。横穴は通常複数で存在するため、比較的広い範囲の調査を行なつたが、結局、1基が発見されたにとどまり、横穴の下方より土器が出土したのは後世の掻出しのためであると判明した。

玄室はこの地域に多くみられる正方形プランでS-45°-Eに開口する。規模は奥行1.0m、幅1.0mで床面には横穴の中心に延びる排水溝をもつ。玄室内の排水溝は奥壁より0.5m前方から玄門まで直線的に掘り込まれたもので幅8cm~24cm、深さ5cmを測る。天井、壁は風化が著しく、稜線もほとんど残さないが、整正家形妻入に加工が施されている。両側壁はゆるい傾きで0.7mのぼり、そこから大きく傾いて天井稜線につながる。奥壁はほぼ垂直に0.7mのぼり、そこから大きく傾いて天井につながる。玄室高は1.2~1.3m程であろう。

羨道は中心軸より東に偏っており、奥の幅1.0m、前方の幅0.8mを測る。ここも玄室内と同様に風化が著しいが、現状ではドーム状になって、高さ0.9mを測る。羨門から前庭部にかけては大きくひろがり、その境に10cm程の段を有し、幅10cm、深さ2~3cmの溝をもつ。この溝は排水溝の一部と考えられるが、閉塞施設の一部とも考えられる。前庭部は玄門との境で幅1.4mで、両壁とも広がりながら、西側壁は3.2m、東側壁は2.6mのびる。床面には中心軸に沿って幅1.8~2.2cmの溝が2.3m程のび、玄門部より1.3mの地点で東側壁より延びる排水溝とぶつかる。玄門部より前庭端部までは長さ3.8m、レベル差0.7mを測る。

前庭部は丘陵斜面を掘り抜いて平坦面を設けたものであり、玄門上部には斜面を掘り抜いた時の稜線がみられる。その頂点は前庭部床面より4.0mを測る。

遺物は玄室内より是一片も出土していないが、前庭部や前方の斜面より須恵器片が多数出土した。特に横穴前方の斜面では、約4m下方よりも検出されており、周間に横穴、古墳がないことより玄室内の土器が一度に掻き出されたものと推定する。遺物の全てが横穴外より出土したため、破片状になった遺物が多かった。須恵器の蓋、壺、高壺、匙、瓶、土師器の壺が前庭部より斜面にかけて出土し、前庭部より金環1個と、土師質土器が出土する。

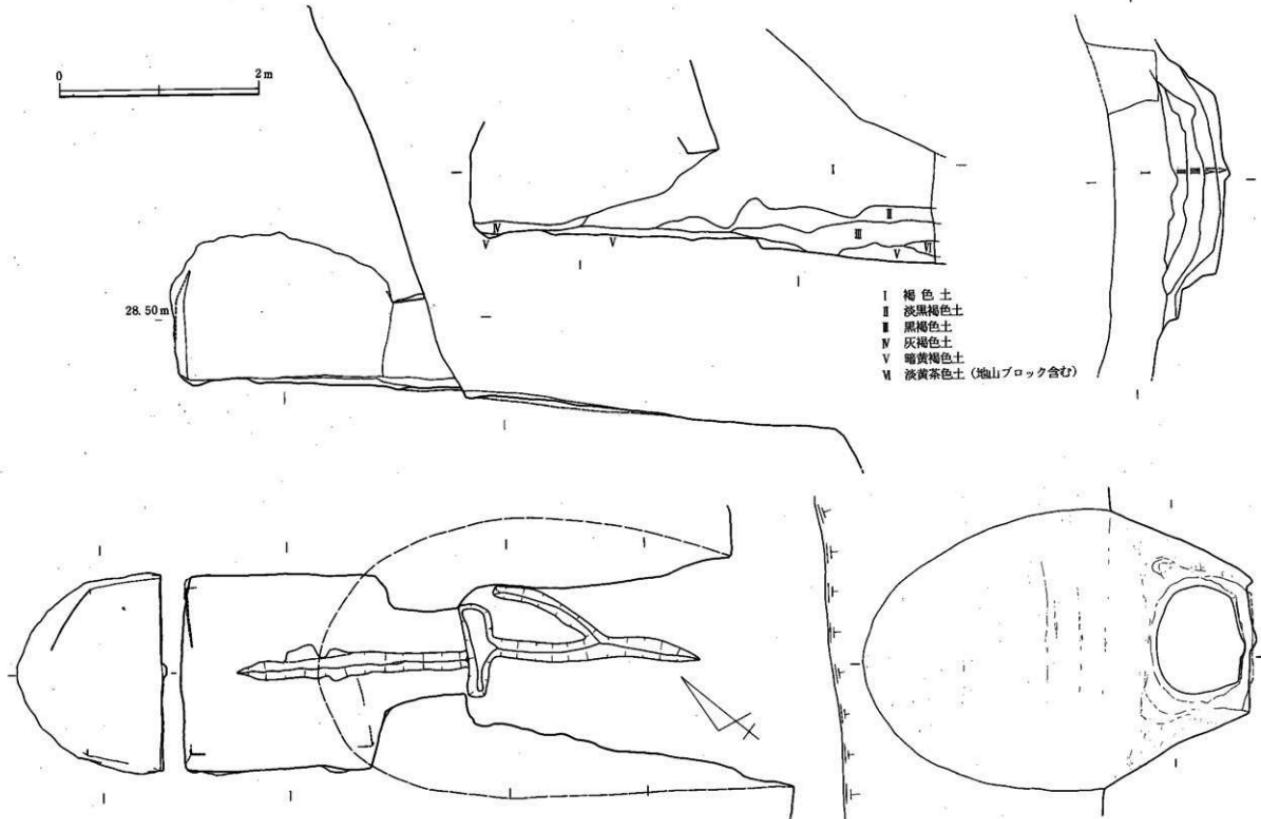


図39. 矢頭横穴実測図

このうちの須恵器は山陰の須恵器編年Ⅳ期に含めうるものであり、古墳時代後期のものといえるが、その中でも若干の時期差が認められる。須恵器の大部分は和泉陶邑古窯跡群の須恵器編年Ⅰ型式6段階にあたるが、4はⅣ型式1段階にあたる。これらの違いが追葬によるものか、流れ込みによるものかは明らかにできなかった。

土層図を観察するとこの横穴の土層は5層よりなっている。暗黄褐色のV層は横穴全体に5~10cmの厚さをもち、その上にⅠ層とⅡ層がのり、表土の流入をみる。この中で土器を含むものは前庭部のみで、V層、Ⅰ層に須恵器、Ⅱ層に土師質土器を含む。この土層のみでは、追葬などを確認できないが、中世になっての盗掘が考えられ、この時点で土器の掻き出しが行われた可能性を考える。

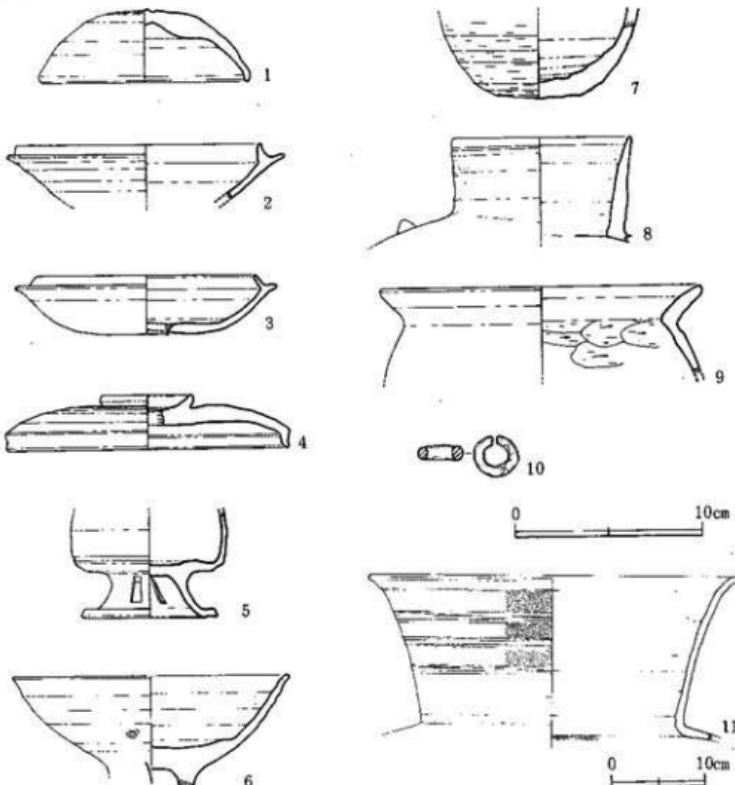


図38. 矢頭横穴出土遺物実測図

## VI 小 結

清水谷遺跡、矢頭遺跡からは弥生墳墓一基、古墳二基、横穴一基、住居跡群二ヶ所が発掘調査された。このうち特に弥生墳墓、住居跡群の調査例は町内でも少く、宍道湖南岸域の文化様相を知る上で貴重な資料となった。

弥生墳墓である清水谷2号墓は九重式土器を出土する弥生時代後期の墳墓である。

一方、近接して存在する清水谷1号墳、清水谷6号墳は山陰須恵器編年Ⅳ期と古墳時代中期の土器を出土する古墳時代後期と古墳時代中期の墳墓である。これらの3基は南に分布する水溜古墳群の一画を占るもので、宍道湖南岸に存在する大古墳群の一端を知り得るものであったが、世代墓的様相を示さず、近接して立地しながら年代の隔りをもつことがその特色である。

矢頭横穴は丘陵斜面の確認されたもので町内に広くみられる整形家形の横穴である。盗掘を受けているものの、山陰の須恵器編年Ⅳ期<sup>注15</sup>の土器を周囲より多量に出土している。また、町内での横穴の調査例は少いものの、開口した様穴の配置状況をみると、才横穴群にみられるように一区画に群をなして穿たれているが、矢頭横穴は周囲の確認調査によって一穴のみ単独に存在していることが確認された。

二ヶ所で発見された住居跡群は掘立柱をもつものと竪穴住居跡群で、前者をA区、後者をB区と呼んでいる。A区からは多数の柱穴と、須恵器が検出されているが、時期の明確な建物は確認されなかった。B区からは6棟の竪穴住居跡が検出されており、出土遺物と切り合い関係より住居の変遷が窺える。1号住居跡は出土遺物より弥生時代後期に相当するが、2号、3号、4号、5号、6号住居跡は古墳時代中期の土器を出土する。この古墳時代中期の住居跡は切り合いより3号→2号、6号→5号の新旧関係を知り得るもの、土器を観察する限り、大きな年代差は認め難い。

以上調査結果の概略を述べたが、清水谷遺跡、矢頭遺跡を通して明らかになった点と今後の課題を列記する。

1. 今回の調査に先立って発見された水溜古墳群は宍道湖南岸域でも最大級の古墳群であるが、今回の発掘結果を含め総合的調査が求められる。
2. 横穴は群を成すのが一般的であるが、今回の調査では単独に存在する横穴が確認されている。群存在と単独存在の差異を検討する必要があろう。
3. 住居跡の調査例は町内でも数少ないが、住居跡の立地を考えた場合、竪穴住居跡を多数出土した矢頭B区は南向きの緩斜面で、現在でも水の豊富な地である。今後の住

居跡調査の参考にしたい。

4. 矢頭B区の竪穴住居跡からは多数の土師器が出土しており、その大半が古墳時代中期のものである。従来、比較的出土例の少いものであるので貴重な資料となり得ると考えている。

注

1. 『宍道町誌』 宍道町 1963年
2. 『山陰本線玉造温泉、来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告』日本国有鉄道大阪工事局 1968年
3. 『松石古墳群』 宍道町教育委員会 1978年
4. 注1及び『宍道町埋蔵文化調査報告』2 宍道町教育委員会 1980年
5. 注4と同じ
6. 『宍道町埋蔵文化財調査報告』2 宍道町教育委員会 1980年
7. 注3と同じ
8. 注6と同じ
9. 加藤義成 『校注出雲國風土記』 1965年
10. 山本 清 「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)
11. 注1、10と同じ
12. 『陶色』Ⅱ 大阪府教育委員会 1981年
13. 注10と同じ
14. 注12と同じ
15. 注10と同じ

番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第7回 1	清水谷1号墳	須恵器 蓋		ゆるやかな段をもつ。	胎土 密 焼成 良好 色調 青灰色	上部にへら削り。
第7回 2	清水谷1号墳	須恵器 脚付壺		器体の大半を欠くが、高台をもつ。	胎土 密 $1\text{mm}$ 大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 青灰色	
第7回 3	清水谷1号墳	壺		口縁の一帯を残し、大半を欠く。	胎土 密 焼成 良好 色調 青灰色	波状文をもつ。
第10回 1	清水谷2号墓	壺	口径 16.3	口縁は開き気味にひびく。	胎土 $2\text{mm}$ 大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縁部に凹線を 7 条もつ。
第10回 2	清水谷2号墓	壺	底径 6.5	平底をもつ。	胎土 $0.2\text{mm}$ 大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	
第10回 3	清水谷2号墓	壺	底径 6.0	底は平らになるが、やくほんでいる。	胎土 $4\text{mm}$ 大の石英を大量に含む。 焼成 良 色調 外面 白褐色 内面 白褐色	内面にナデを残す。
第10回 4	清水谷2号墓	高杯	口径 22.6 底径 11.5 高さ 15.7 脚高 8.7	底部は段をもち、大きく広がる。脚はゆるやかに広がり、先端部には凹線をめぐらす。	胎土 $1\text{mm}$ 大の石英、長石を少量含む。 焼成 良好 色調 壺 白褐色 脚 白褐色	环外面はへら磨き、一部横ナデ、指ナデ、内面はへら磨き。脚外面は縱方向のへら磨き、内面上部はへら調整をもつ。
第13回 1	清水谷6号墳	高杯		环、脚の接合部のみを残す。	胎土 密 焼成 普通 色調 赤褐色	接合部はナデ。脚外面はへら磨き。
第22回 1	矢頭1号住居跡	壺	口径 14.2	口縁はやや広がり気味にひびく。	胎土 $1\text{mm} \sim 2\text{mm}$ の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縁部はナデ。胴内面に削り。
第22回 2	矢頭1号住居跡	高杯	口径 16.2	底部は丸く内湾する。	胎土 $2\text{mm}$ 大の石英、長石を少量含む。 焼成 良好 色調 白褐色	内外面ともにナデ。
第23回 1-1	矢頭2号住居跡	壺	口径 13.4	口縁は内湾しながら広がる。端部はつまみ出す。	胎土 $1\text{mm} \sim 2\text{mm}$ の石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 白褐色	磨擦のため不明。
第23回 1-2	矢頭2号住居跡	壺	口径 15.5	口縁のみを残す。単純に広がる。	胎土 $1\text{mm} \sim 2\text{mm}$ 大の石英、長石を含む。 焼成 良 色調 白褐色	
第23回 1-3	矢頭2号住居跡	壺	口径 13.8	口縁は直線的に広がり、端部をつまみ出す。	胎土 $1\text{mm} \sim 2\text{mm}$ 程の石英、長石を含む。 焼成 良 色調 浅褐色	磨擦のため不明。
第23回 1-4	矢頭2号住居跡	壺	口径 12.3	胴部の大半を欠く。口縁は単純にひびく。	胎土 $1\text{mm}$ 程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縫は回転ナデ。胴内面にへら削り。
第23回 1-5	矢頭2号住居跡	壺	口径 13.2	胴部を欠く。口縫部は直線的にひびく。	胎土 緩密 $0.2\text{mm}$ 大の石英、長石を含む。 焼成 不良 色調 白褐色	内外面ともに回転ナデ。
第23回 1-6	矢頭2号住居跡	壺	口径 12.8	胴部の大半を欠く。口縫は外反しながら外にひびく。	胎土 緩密 焼成 良好 色調 深褐色	口縫はナデ。胴内部は削り。

標	遺	構	器	種	法	量	形	態の特	胎	土・焼	手	法の特
番	号				量	(cm)		徴	土	成		
第23回 1-7	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	15.0	洞を欠く。口縁は大き く内湾する。		胎土 1mm程の石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 淡褐色		内外面ともに回転ナデ。			
第23回 1-8	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	13.2	口縁は単純にのびる。		胎土 1mm程の石英を 含む。 焼成 普通 色調 白褐色					
第23回 1-9	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	16.0	二重口縁の名残をもつ。		胎土 やや粗 3mm以下 の砂やや多含。 焼成 良好 色調 白肌色		内外面ともに回転ナデ。 胸内面はへら削り。			
第23回 1-10	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	16.5	胸部を欠く。口縁端部 はつまみのはず。		胎土 やや粗 2mm以下 の砂やや多含。 焼成 良好 色調 肌かっ色、部分 的に黒ずみ。					
第23回 1-11	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	15.3	胸部を欠く。口縁は二 重口縁の名残をもつ。		胎土 1.5mm～2mmの 石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色		口縁は内外面ともにナ デ。胸部内面はへら削 り。			
第23回 1-12	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	17.0	胸部を欠く。口縁は直 線的にのびる。		胎土 やや粗 3mm以下 の砂やや多含。 焼成 良好 色調 白肌色		口縁は内外面ともにナ デ。			
第24回 2-1	矢頭2号住居 跡	坏	口 径	9.8	口縁部は短し外反させ る。		胎土 1mm大の石英を 少量含む。 焼成 良好 色調 赤褐色		内外面ともにナデ。			
第24回 2-2	矢頭2号住居 跡	坏	底 径	6.4	口縁部を欠く。		胎土 常 焼成 普通 色調 赤褐色		内外面ともにナデ。			
第24回 2-3	矢頭2号住居 跡	坏	口 径	6.2	ゆるやかな頸部をもつ。		胎土 1mm程の石英、 長石を少量含む。 焼成 不良 色調 外画赤褐色 内面灰褐色		外面へら調整。			
第24回 2-4	矢頭2号住居 跡	坏	口 径	7.1	ゆるやかな頸部をもつ。		胎土 1mm大の石英、 長石を少量含む。 焼成 不良 色調 赤褐色一部濃灰 色。		内外ともに荒いナデ。			
第24回 2-5	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	15.0	胸部を欠く。口縁部は 直線的にのびる。		胎土 0.2mm～0.3mm 程の石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 外面淡褐色		内外面ともに回転ナデ。			
第24回 2-6	矢頭2号住居 跡	壺	胸 径	16.2	丸味をもつ。		胎土 繊密 焼成 普通 色調 赤褐色		外面削もナデ。内面削 調整。			
第24回 2-7	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	9.2	胸部を欠く。口縁は外 湾しながら外に開く。		胎土 0.1mm程の石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色		口縁は内外面ともにナ デ。胸内部はへら削り。			
第24回 2-8	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	18.6	胸部を欠く。外湾しな がら広がる。		胎土 0.2mmの石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色		回転ナデ。			
第24回 2-9	矢頭2号住居 跡	甕	口 径	12.3	胴の下部を欠く。口縁 は直線的にのび、端部 で外反させる。		胎土 1mm程の石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 淡褐色		外面に刷毛目をもつ。			
第24回	矢頭2号住居	甕	口 径	14.4	胴底部を欠く。口縁は 直線的にのびる。		胎土 0.1mm～0.4mm 程の石英を含む。		口縁は回転ナデ。胴部 外面ナデ。			

標 記 図 号	造 構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成	手 法 の 特 徴
2-10	跡				焼成 良好 色調 赤褐色	
第24図 2-11	矢頭2号住居 跡	甕	口 径 18.5	口縁は二重口縁の名残りをもつ。	胎土 0.5 mmの大粒の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縁は回転ナデ。肩外側は刷毛調整、内面はへら削り。
第25図 3-1	矢頭2号住居 跡	高 环		内窓しながら隙々に広がる。外側に残し段をもつ。	胎土 2 mmの大粒の石英を少量含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	内外面ともにナデ。
第25図 3-2	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 18.6	脚部を欠く。段を境に大きく外反する。	胎土 2 mm以下の砂を少含む。 焼成 良好 色調 肌かっ色	内外面ともにナデ。
第25図 3-3	矢頭2号住居 跡	高 环		环端部と脚部を欠く。	胎土 密 1 mm以下の砂を少含む。 焼成 良好 色調 肌かっ色	磨滅のため不明。
第25図 3-4	矢頭2号住居 跡	高 环	底 径 高 脚 高 10.4 6.8	円錐端部を欠く。	胎土 3 mm以下砂を含む。 焼成 良好 色調 橙肌色	环部はナデ。脚内面はへら削り。
第25図 3-5	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 底 径 高 脚 高 16.8 9.8 13.0 7.0	环は段をもたず丸く内湾して広がる。脚は下1/3で広がる。	胎土 疎密 1 mm~2 mmの石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 环 外面 白褐色 内面 赤褐色 脚 内外面 赤褐色	环部は内外面ともにナデ。脚は外面へら磨き。
第25図 3-6	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 21.8	外反しながら外に広がる。	胎土 3 mm以下の砂を少含む。 焼成 良好 色調 赤褐色~肌色	内面は丁寧なナデ。外 面は回転ナデ。
第25図 3-7	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 22.1	丸く外反する。	胎土 密 1 mm以下の砂を極少含む。 焼成 良好 色調 肌かっ色	内外ともにナデ。
第25図 3-8	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 脚 高 底 径 高 脚 高 17.8 6.6 10.8 12.7	环部はゆるやかな段をもち、大きく広がる。脚部は円形三方スカラシ	胎土 0.5 mm~1 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 淡黄色	
第25図 3-9	矢頭2号住居 跡	高 环	口 径 底 径 高 脚 高 20.5 13.4 13.5 7.8	环は段を境に大きく広がる。环は下1/3で大きく広がる。	胎土 1 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	环は内外面ともにナデ。脚は外面へら磨き。
第26図 4-1	矢頭2号住居 跡	高 环	底 径 脚 高 8.7 4.4	环部を欠く。	胎土 密 3 mm以下の砂を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	磨滅のため不明。
第26図 4-2	矢頭2号住居 跡	高 环	底 高 9.5 5.6	环部を欠く。下1/3で大きく開く。	胎土 2 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	外面ナデ。内面絞り込む。
第26図 4-3	矢頭2号住居 跡	高 环	底 高 11.0 6.5	下1/4で大きく広がる。	胎土 2 mm以下の砂をやや多く含む。 焼成 良好 色調 橙肌色(内、白肌色)	内面はへら削り。
第26図 4-4	矢頭2号住居 跡	高 环	底 高 10.8 6.4	ゆるやかに脚は開く。	胎土 3 mmの大粒の長石を少含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	外面ナデ。

標図 番号	遺構	器種	法量 [cm]	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	
第26図 4-5	矢頭2号住居跡	高杯	底径 高さ	10.0 7.6	环部を欠く、下1/5で大きく広がる。	胎土 0.1 mm~1 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色(丹塗)	外面ナデ。内面削り。
第26図 4-6	矢頭2号住居跡	高杯	底径	12.7	环部を欠く。脚はハの字状に大きく開く。	胎土 0.1 mm~0.2 mm 大の石英、長石を含む。 焼成 不良 色調 外面赤褐色 内面白褐色	
第26図 4-7	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	10.4 6.8	外面へら磨き。内面へら削り。	胎土 繁密 焼成 良好 色調 赤褐色	外面へら磨き。内面へら削り。
第26図 4-8	矢頭2号住居跡	高杯	底径 高さ	11.9 6.7	环部を欠く。下1/4で大きく開く。円形二方スカシをもつ。	胎土 1 mm大の石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面へら磨き。
第26図 4-9	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	11.2 7.1	下1/4で大きく開く。	胎土 1 mm~2 mm程の長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面へら磨き。内面削り。
第26図 4-10	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	9.9 6.1	环部を火く。脚はハの字状にゆるく開く。	胎土 4 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	脚外面は調整せず。
第26図 4-11	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	11.7 7.3	环部を欠く。円形の三方スカシをもつ。	胎土 密0.1 mm程の長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面磨滅。内面指頭圧痕をもつ。
第26図 4-12	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	14.0 6.0	环先端部を欠く。脚は下1/3で大きく開く。	胎土 0.1 mm~0.3 mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	环は内外面ともにナデ。脚は外面へら磨き、内面へら削り。
第26図 4-13	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	11.9 7.1	环部を欠く。下1/3で大きく開く。	胎土 0.5 mm~1.0 mmの石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面へら磨き。内面に絞り込み。
第26図 4-14	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	12.0 7.7	环上部と脚端部を欠く。三方の円形スカシをもつ。	胎土 3 mm大の石英、長石を多量に含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	
第26図 4-15	矢頭2号住居跡	高杯	底径 脚高	11.9 7.2	环端部を欠く。脚に円形三方スカシをもつ。	胎土 密0.1 mm~0.2 mm程の長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	脚の外面にへら磨き。
第27図 5-1	矢頭2号住居跡	高杯			环部、脚端部を欠く。	胎土 1 mm以下の石英、長石も含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	内面に絞り込み。
第27図 5-2	矢頭2号住居跡	高杯			环部と脚端部を欠く。	胎土 密 焼成 良好 色調 赤褐色	脚外面へら磨き。内面に絞り込みがみられる。
第27図 5-3	矢頭2号住居跡	高杯			口縁部と脚部を欠く。	胎土 繁密 焼成 良好 色調 外面赤褐色 内面暗褐色	内面ナデ。外面へら磨き。
第27図 5-4	矢頭2号住居跡	高杯			环端部と脚部を欠く。	胎土 1 mm大の石英を少量含む。 焼成 良好 色調 白褐色	内面ともにナデ。
第27図 5-5	矢頭2号住居跡	高杯			接合部は細くくびれる。	胎土 繁密 焼成 普通 色調 赤褐色	环部はナデ。脚部外面へら磨き。

番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第27図 5-5	矢頭2号住居跡	高杯		環端部、脚端部を欠く。	胎土 密2mmの大石英を含む。 焼成 良 色調 赤褐色	环内面ナデ。脚外面へら磨き。
第27図 5-7	矢頭2号住居跡	高杯		环上部と脚端部を欠く。	胎土 密石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤茶色(丹塗)	环内面はへら磨き。脚外面へら磨き。
第27図 5-8	矢頭2号住居跡	高杯		环端部を欠く。円形三方スカシをもつ。	胎土 0.1mm~0.3mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色(丹塗)	环内外面ともにナデ。脚外面はへら磨き。
第27図 5-9	矢頭2号住居跡	高杯		环端部と脚端部を欠く。	胎土 1mm~2mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	环内面は丁寧なナデ。
第28図 1	矢頭2号住居跡	甕	口径 11.7	外にまっすぐのびる。	胎土 粗2mm以下の長石、石英を多く含む。 焼成 不良 色調 淡赤褐色	不明。
第28図 2	矢頭4号住居跡	甕	口径 18.7	口縁は外反する。	胎土 1mmの大石英を含む。	横ナデ。
第28図 3	矢頭4号住居跡	高杯	口径 19.4	口縁と脚部を欠く。	胎土 0.1mm~0.2mm大の石英、長石を少量含む。 焼成 良好 色調 外面 赤褐色 内面 白褐色	外面に放射状の刷毛目をもつ。
第28図 4	矢頭4号住居跡	高杯		口縁と脚部を欠く。	胎土 1mm~2mm石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	外面に刷毛目をもつ。
第28図 5	矢頭4号住居跡	高杯		口縁と脚部を欠く。	胎土 細かい長石、石英、雲母を含む。 焼成 不良 色調 赤褐色	磨滅のため不明。
第28図 6	矢頭4号住居跡	高杯		口縁と脚部を欠く。	胎土 2mm以下の長石、石英、雲母を含む。 焼成 不良 色調 淡赤褐色	磨滅のため不明。
第28図 7	矢頭4号住居跡	高杯		脚部を欠く。	胎土 細かい長石を含む。 焼成 不良 色調 淡赤褐色	内外面ともにナデ。
第28図 8	矢頭4号住居跡	高杯		环部と脚部を欠く。	胎土 細かい長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面に刷毛目。内面にケズリ。
第28図 9	矢頭4号住居跡	高杯		环部と脚部先端を欠く。	胎土 細密 焼成 良 色調 赤褐色	外面へら磨き。内面削り。
第28図 10	矢頭4号住居跡	高杯		环部と脚先端を欠く。	胎土 1mmの大石英、長石を含む。 焼成 良 色調 外面 白褐色 内面 淡灰色	外面へら磨き。内面ナデ。
第30図 1-1	矢頭5号住居跡	高杯	底径 8.2 高 4.8	三方に円形スカシをもつ。	胎土 細かい長石をわずかに含む。密。 焼成 良 色調 青灰色	内外面ともに回転ナデ。
第30図 1-2	矢頭5号住居跡	甕	口径 11.0	脚の一部を残す。	胎土 細かい長石を含む。 焼成 良 色調 暗青灰色	刻突文を持ち、底部にへら削りを施す。

擇図 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第30図 1-3	矢頭5号住居跡	甕	口径 16.1	二重口縁の名残りをとどめ、口唇部は外反する。	胎土 1mm大の石英、長石、雲母を含む。 焼成 普通 色調 淡褐色	内外面ともに回転ナデ。
第30図 1-4	矢頭5号住居跡	甕	口径 13.0	二重口縁の名残りをとどめながらも直線的に広がる。	胎土 密 焼成 良 色調 暗褐色	内面、外面とも横ナデ。
第30図 1-5	矢頭5号住居跡	甕	口径 12.6	単純に外反する。	胎土 3mm大の石英、長石を含む。 焼成 不良 色調 白褐色	内面、外面とも横ナデ。
第30図 1-6	矢頭5号住居跡	甕	口径 13.6	外反しながら単純に広がる。	胎土 2mm以下の長石、石英を含む。 焼成 普通 色調 (内面) 赤橙色 (外面) 暗褐色	内面にへら削りをもつ。
第30図 1-7	矢頭5号住居跡	甕	口径 19.2	口縁は直線的にひびく。	胎土 密 1mm以下砂含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	口縁部には回転ナデ。 内面側にはへら削りをもつ。
第30図 1-8	矢頭5号住居跡	甕	口径 15.5	口縁は外反しながら広がる。	胎土 2mm大の長石、石英を含む。 焼成 普通 色調 暗赤橙色	内面にへら削りをもつ。
第30図 1-9	矢頭5号住居跡	杯	口径 底径 高さ 13.2 6.9 7.8	基部は丸く広がる。	胎土 2mm大までの長石、石英粒を含む。 焼成 不良 色調 赤褐色	外面下部指頭状痕をもつ。
第30図 1-10	矢頭5号住居跡	甕	口径 10.4	口縁は直線的にひびく。	胎土 3mm大の石英を含む。	口縁はていねいにナデる。内面には形成時の接合面がみられる。
第30図 1-11	矢頭5号住居跡	甕	口径 16.0	割面を欠く。口縁はゆるやかに外反する。	胎土 2mm以下の砂やや多合。 焼成 普通 色調 白肌色	口縁は回転ナデ。内面にへら削り。
第30図 1-12	矢頭5号住居跡	甕	口径 12.0	口縁は外反しながら短く広がる。	胎土 相 3mm以下砂多合。 焼成 普通 色調 暗茶かっ色	口縁は回転ナデ。内外面には刷毛目。内面にはへら削りを観す。
第30図 1-13	矢頭5号住居跡	甕		口唇部と底部を欠損する。	胎土 密 焼成 良好 色調 淡褐色	胎部外面に刷毛調整を施す。
第30図 1-14	矢頭5号住居跡	高杯	口径 17.6	杯底部と脚部を欠く。	胎土 粗 2mm以下砂多合。 焼成 良好 色調 赤褐色	
第30図 1-15	矢頭5号住居跡	高杯	口径 18.6	外曲に段をもつ。	胎土 1mm大の長石を多く含む。 焼成 不良 色調 赤褐色	外曲底部に放射状の刷毛目をもつ。
第31図 2-1	矢頭5号住居跡	高杯	口径 21.6	外面に段をもち、直線的に広がる。	胎土 やや粗 2mm以下の砂多合。 焼成 良好 色調 赤褐色	磨感のため不明。
第31図 2-2	矢頭5号住居跡	高杯		段をもたず、丸く外反する。	胎土 4mm大の石英を少額含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	杯底部に刷毛調性をおこなう。
第31図 2-3	矢頭5号住居跡	高杯		口唇部、脚部を欠く。	胎土 0.5mm大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 赤褐色	杯底部に刷毛調性をもつ。

標識番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第31回 2-4	矢頭5号住居跡	高坏		接合部のみを残す。	胎土 1mm大の砂多含む。 焼成 良好 色調 赤橙色	环部はナデ。脚外面はへら磨き。
第31回 2-5	矢頭5号住居跡	高坏			胎土 密(石、微粒含む) 焼成 普通 色調 赤橙色	脚部にしほり込みの跡がみられる。調整は風化のため不明。
第31回 2-6	矢頭5号住居跡	高坏		脚部は下1/3の地点でハの字状に大きく広がる。	胎土 1mm大の長石含む。 焼成 普通 色調 赤橙色	風化しており不明。
第31回 2-7	矢頭5号住居跡	高坏		接合部のみを残す。	胎土 1mm大の石英、長石を含む。 焼成 不良 色調 外面 白褐色 内面 露灰色	脚部外面はナデ。内面は削り。
第31回 2-8	矢頭5号住居跡	高坏		三方に円形スカシを持つ。	胎土 3mm以下の大石英、長石を含む。 焼成 普通 色調 浅褐色	風化しており不明。
第31回 2-9	矢頭5号住居跡	高坏		上部、底部を欠損するが、脚にむかってハの字形に開く。	胎土 密 焼成 普通 色調 淡黄褐色	風化しており不明。
第31回 2-10	矢頭5号住居跡	高坏		环部、脚部を失損する。	胎土 2mm大の長石、石英を含む。 焼成 普通 色調 褐色	外面に縱方向のへら磨きを施す。
第31回 2-11	矢頭5号住居跡	高坏		环部、脚部を欠損する。	胎土 1mm大の長石を含む。 焼成 普通 色調 淡褐色	
第31回 2-12	矢頭5号住居跡	高坏		环部、脚部を失損する。	胎土 密 焼成 普通 色調 黄褐色	風化が著しく不明。
第31回 2-13	矢頭5号住居跡	高坏 底 脚 高	10.4 5.7	下2/5で大きく広がる。	胎土 1mm~2mm大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	外面へら磨き、内面削り。
第31回 2-14	矢頭5号住居跡	壺		肩部の一帯を残す。	胎土 3mm以下の長石、石英、雲母を含む。 焼成 普通 色調 外面 黄褐色 内面 黑色	外面には2列の竹管又は横方向の刷毛目をもつ。
第32回 1	矢頭6号住居跡	壺	口 径 14.0	退化した二重口縁をもつ。	胎土 1mm~2mmの石英を含む。 焼成 良好 色調 黑灰色	内外面とも機ナデ。
第32回 2	矢頭6号住居跡	壺	口 径 16.3	口縁は段をもち、広がる。	胎土 4mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 黄褐色	口縁は横ナデ、脚外部はへら磨き、内部はへら削り。
第32回 3	矢頭6号住居跡	壺	口 径 14.0	口縁と底部を欠く。	胎土 4mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 黄褐色	外面刷毛ナデ。内面に指頭圧痕をもつ。
第32回 4	矢頭6号住居跡	壺	脚 径 16.9	脚が張る。	胎土 5mm以下の長石、雲母、石英を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	外面下部に縁を付着する。内面には指頭圧痕をもつ。
第33回 1-1	矢頭5、6号住居跡	須恵器			胎土 密 焼成 良好 色調 暗青灰色	回転ナデをもつ。

括弧番号	遺構	器種	法量 cm	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第33回 1-2	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 11.7	直線的に広がり、口唇部で大きく外窩する。	胎土 細かい長石、石英を含むが密。 焼成 良 色調 黄褐色	
第33回 1-3	矢頭5、6号 住居跡	鉢	口径 8.7 底径 3.9 高さ 5.0	口唇を外側に屈曲させる。	胎土 密 焼成 良 色調 淡褐色	外面上部に指頭圧痕、 内面に繊力向の削り。
第33回 1-4	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 8.5	口縁は先細り気味にのびる。	胎土 普通 1mm大の長石を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	胴内面に指頭圧痕をもつ。
第33回 1-5	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 9.6	直線的に外にのびる。	胎土 2mm以下の長石、 石英を含む。 焼成 不良 色調 赤褐色	磨滅が著しく、不明。
第33回 1-6	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 14.0	二重口縁の名残りをもつ。	胎土 1mm大の長石、 石英を含む。 焼成 良 色調 淡赤褐色	口縁部は回転ナデ。
第33回 1-7	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 11.8	短く広がる。	胎土 2mm大の長石を 多く含む。 焼成 普通 色調 (外) 暗褐色 (内) 淡黒褐色	磨滅が著しいが、胸部 内面に指頭圧痕をもつ。
第33回 1-8	矢頭5、6号 住居跡	甕		口縁は直線的にのびる。	胎土 2mm大の長石を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	胴内面には上部でタテ 方向、下方で斜めの削りをもつ。
第33回 1-9	矢頭5、6号 住居跡	甕	口径 15.1	丸く胸が張る。	胎土 1mm大の長石を含むが密。 焼成 良 色調 淡黄褐色	
第33回 1-10	矢頭5、6号 住居跡	高杯	口径 17.0	脚を欠損する。直線的 にのび外面に段を有する。	胎土 2mm以下の長石、 石英を含む。 焼成 普通 色調 淡赤褐色	
第33回 1-11	矢頭5、6号 住居跡	高杯	口径 24.6	内湾しながら大きく広 がる。	胎土 密 焼成 普通 色調 淡赤褐色	
第33回 1-12	矢頭5、6号 住居跡	器台		ハの字状に広がる。	胎土 1mm大の石英、 長石を多く含む。 焼成 不良 色調 赤褐色	内面にへら削りをもつ。
第34回 2-1	矢頭5、6号 住居跡	高杯	口径 18.8	底部を欠損する直線 的に広がる。	胎土 細かい長石粒を 含むが密。 焼成 普通 色調 淡褐色	内面の一部に斜めの崩 毛目をもつ。
第34回 2-2	矢頭5、6号 住居跡	高杯		脚部と杯部の接合部は 肉厚である。	胎土 密 焼成 普通 色調 赤褐色	杯部、脚部外縁の接合 部に指頭圧痕をもつ。
第34回 2-3	矢頭5、6号 住居跡	高杯		杯は段をもたず、内湾 しながら広がる。	胎土 細かい長石、石 英を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	杯、脚の接合部に指頭 圧痕、内面にしばり込 みをもつ。
第34回 2-4	矢頭5、6号 住居跡	高杯		上部と下部を欠損する。	胎土 1mm大の石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	外面へら磨き、内面絞 り込み。
第34回 2-5	矢頭5、6号 住居跡	高杯		脚の接合部は細くしづ り込む。	胎土 1mm大長石、石 英を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	

番号	遺構	器種	法量 [cm]	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴
第34回 2-6	矢頭5、6号 住居跡	高杯		外面に段をもち、大きく屈曲する。	胎土 1mm大の長石、 石英を多く含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面には横ナデ、内面 は磨滅のため不明。
第34回 2-7	矢頭5、6号 住居跡	高杯		外面に3mm幅の段をもつ。	胎土 密 焼成 良 色調 淡黄褐色	磨滅のため不明。
第34回 2-8	矢頭5、6号 住居跡	高杯		脚はゆるやかに広がる。	胎土 1mm大の長石含 む。 焼成 普通 色調 赤褐色	脚内上面部にへら削り をもつ。
第34回 2-9	矢頭5、6号 住居跡	高杯		脚部で大きく広がる。	胎土 細かい長石、雲 母を含む。 焼成 普通 色調 外面 赤褐色 内面 黒色	外面に縱方向のへら磨 き、内面に絞りがみら れる。
第34回 2-10	矢頭5、6号 住居跡	高杯		筒状の脚を杯部に接合 する。	胎土 1mm大の長石を 含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	磨滅のため不明。
第34回 2-11	矢頭5、6号 住居跡	高杯		上部と下部を欠損する。	胎土 1mm大の石英を 少量含む。 焼成 良好 色調 白褐色	外面へら磨き、内面絞 り込み。
第34回 2-12	矢頭5、6号 住居跡	高杯		三方に径1cmの円形ス カシをもつ。	胎土 密 焼成 良 色調 黄褐色	内面に絞り込みがみら れる。
第34回 2-13	矢頭5、6号 住居跡	高杯	底径 9.6	脚部でハの字状に大き く開く。	胎土 2mm大の長石、 石英含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	内面に絞り込みのあと がみられる。
第34回 2-14	矢頭5、6号 住居跡	高杯	底 脚 高 11.1 6.3	脚の中央部よりハの字 状に広がる。	胎土 2mm以下の大長石 を含む。 焼成 普通 色調 赤褐色	外面には縦方向の刷毛 目、内面上部には絞り 込み、下部には横刷毛 目。
第34回 2-15	矢頭5、6号 住居跡	高杯	底 脚 高 8.1	脚部でハの字状に大き く開く。	胎土 密 焼成 普通 色調 赤褐色	脚上部を絞り込む。
第34回 2-16	矢頭5、6号 住居跡	高杯	底 脚 高 9.4 4.5	脚の中央部よりハの字 状に広がる。	胎土 細かい雲母、長 石を含むが否。 焼成 普通 色調 淡灰色	外面に縦方向の刷毛目、 内面に絞り目を持つ。
第36回 1	矢頭J区	杯	口 径 12.3	口唇部を欠くが、ほぼ 垂直にたち上がる。	胎土 0.5mm大の石英 を少量含む。 焼成 良好 色調 淡灰色	外面底2/3へら削り、 内面は横ナデ。
第36回 2	矢頭J区	壺	口 径 10.9	直線的に外に広がる。	胎土 繊密 焼成 良好 色調 外面 淡灰色 内面 淡灰色	二段の波状文をもつ。
第36回 3	矢頭J区	杯	口 径 11.4	底部を欠く。	胎土 密 1mm以下の大 石英を含む。 焼成 良好 色調 淡青灰色	外表面ともに回転がナ デ。
第36回 4	矢頭J区	壺	口 径 13.8	口縁は内窪して広がり 先端をつまみ出す。	胎土 1mm大の石英、 長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縁に横ナデを施す。
第36回 5	矢頭J区	壺	口 径 9.7	口縁は短く外反する。	胎土 1mm~2mm大の 石英、長石を含む。 焼成 良 色調 内外面白褐色	口縁には横ナデを施す。

掲 番 号	遺 構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成	手 法 の 特 徴
第36図 6	矢頭J区	高 环		三方に円形のスカシをもつ。	胎土 3mm以下砂をやや多く含む。 焼成 良好 色調 桃肌色	磨滅のため不明。
第37図 1	矢頭横穴	蓋 口 径 11.3		説をもたず、丸味を帶びて形成される。	胎土 密 3mm以下の砂を含む。 焼成 良好 色調 青灰色	外面に回転ナデ、頂部にへら調整。内面は1/3
第37図 2	矢頭横穴	环 口 径 15.0		低いたち上がりをもつ。底部を仄く。	胎土 淡 焼成 普通 色調 外面 白青灰色 内面 茶灰色	内外面ともに回転ナデ。
第37図 3	矢頭横穴	环 口 径 11.6 受部径 14.0 器 高 3.2		5mmほどのたち上がりをもつ。底部は平たい。	胎土 2mm以下砂や多量含む。 焼成 良好 色調 喀灰色 (外面は部分的に自然釉付着)	外面は回転ナデ、底部1/3はへら削り。内面は回転ナデ。
第37図 4	矢頭横穴	蓋 つまみ径 5.0 口 径 15.1		輪状のつまみをもち、口部にはかえりがある。	胎土 密 1mm以下の砂少量含む。 焼成 良好 色調 淡青色	外面は上1/3にへら削り。内面は回転ナデ。
第37図 5	矢頭横穴	低脚环 脚 径 7.3		脚に四形三方スカシをもつ。环部は深いU字形。	胎土 密 1mm以下の砂少量含む。 焼成 良好 色調 青灰色	外面は环、脚とも回転ナデ。环内面は回転ナデの後仕上げナデ。
第37図 6	矢頭横穴	高 环 口 径 14.8		丸く内湾し、一部に穿孔をもつ。脚部を仄く。	胎土 密 焼成 良好 色調 淡灰色	内外面ともに回転ナデ。脚部にはスカシをもつ。
第37図 7	矢頭横穴	盖		底部のみを残す。	胎土 密 2mm以下の砂少量含む。 焼成 良好 色調 喀灰色	外面へら削り。内面回転ナデ。
第37図 8	矢頭横穴	平 瓶 口 径 9.7		口縁部を残す。	胎土 繊密 焼成 良好 色調 淡灰色	口縁は内外面ともに回転ナデ。
第37図 9	矢頭横穴	壺 口 径 17.0		口縁は大きく外反する。	胎土 4mm大の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 白褐色	口縁は内外面ともにナデ。内面は削り。
第37図 11	矢頭横穴	壺 口 径 39.2		口縁はゆるく外反する。	胎土 密 1mm以下の砂少量含む。 焼成 良好 色調 灰色 (口縁内面と肩部外面に自然釉がかかる)	外面は回転ナデの上に波状文、沈線を施す。内面は回転ナデ。

図版 1



清水谷 1号墳発掘調査前（西側より）



清水谷 1号墳発掘調査後（西側より）

図版 2

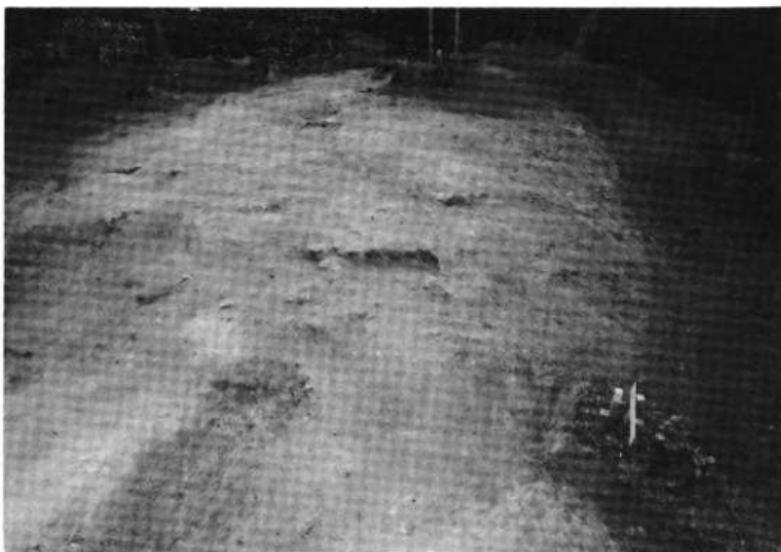


清水谷 1号墳主体部（北側より）



清水谷 2号墳発掘調査前（南側より）

図版 3

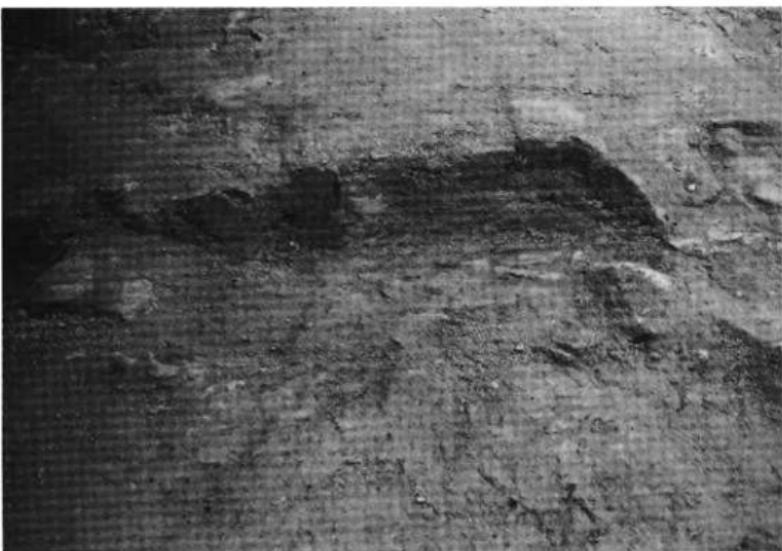


清水谷 2号墓発掘調査後（東側より）



清水谷 2号墓遺物出土状況図

図版 4



清水谷 2号墓主体部（南東方向より）



清水谷 6号墳発掘調査前（北側より）

図版 5

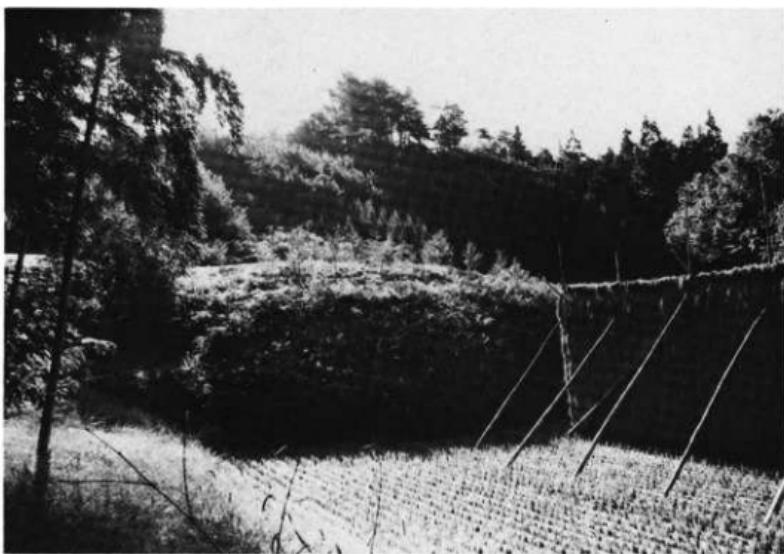


清水谷 6 号墳発掘調査後（南側より）



清水谷 6 号墳主体部（南側より）

図版 6

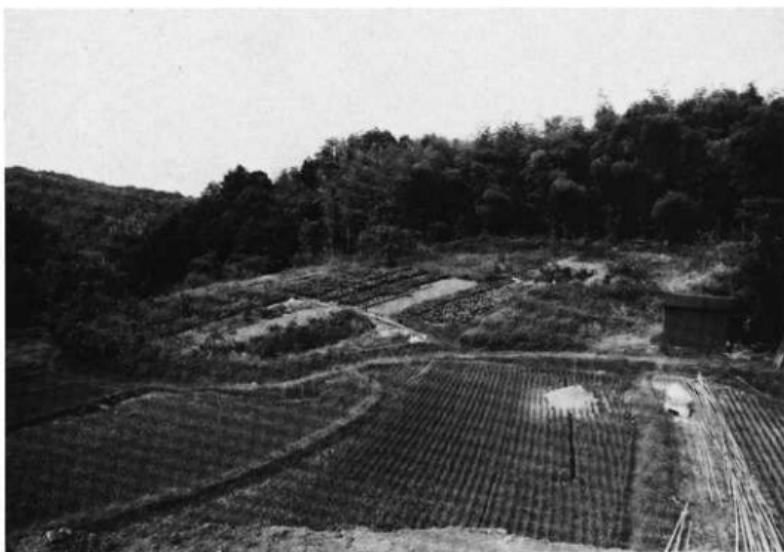


矢頭遺跡A区近景（西側より）



矢頭遺跡A区発掘調査後（東側より）

図版 7

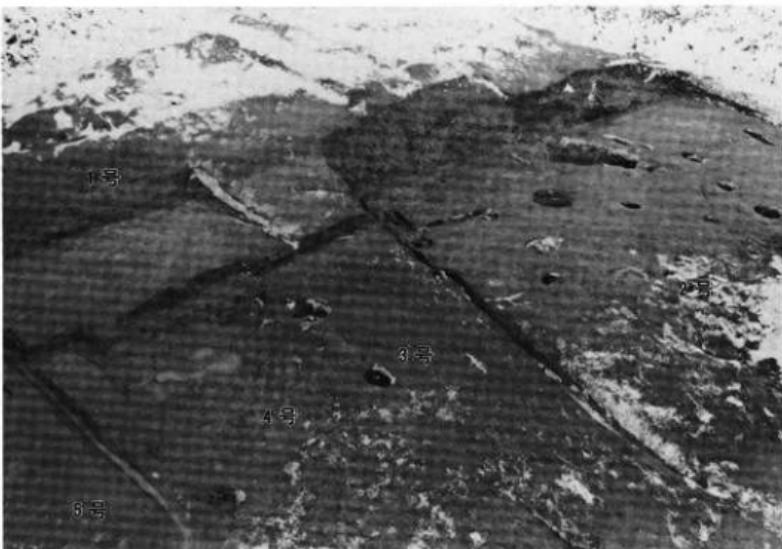


矢頭遺跡B区発掘調査前（東側より）

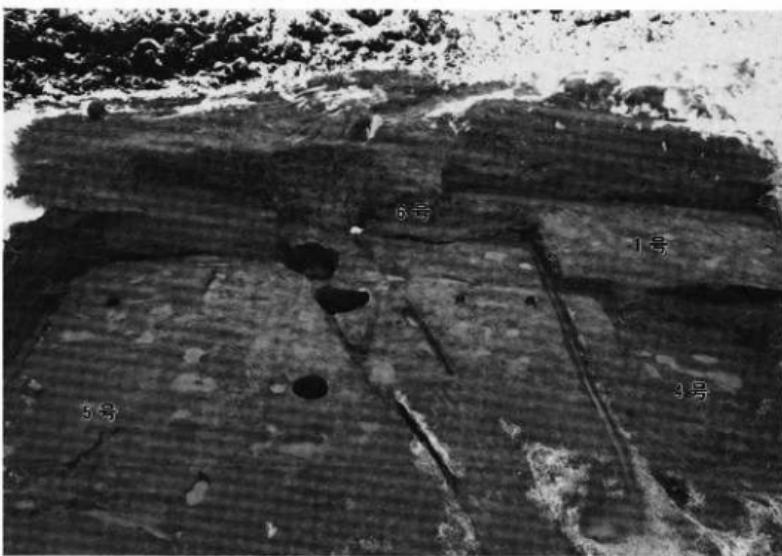


矢頭遺跡B区発掘調査状況（北東側より）

図版 8



矢頭遺跡B区住居跡

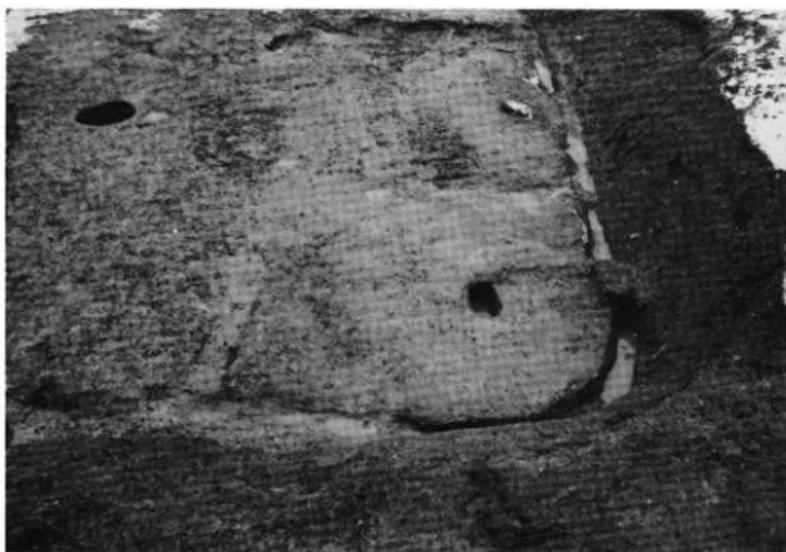


矢頭遺跡B区住居跡

図版 9



B区 2号住居跡遺物出土状況



B区 5号住居（北側より）

図版 10

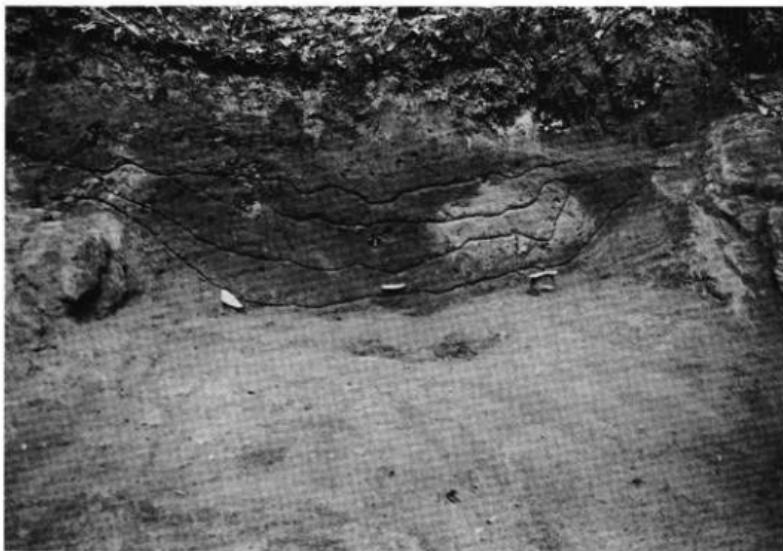


B区 1. 4. 5. 6号住居跡切合部分（北側より）



B区 1. 2. 3. 4号住居跡切合部分（南側より）

図版 11



矢頭横穴前庭堆積土層（南東側より）



矢頭横穴羨道堆積土層

図版 12

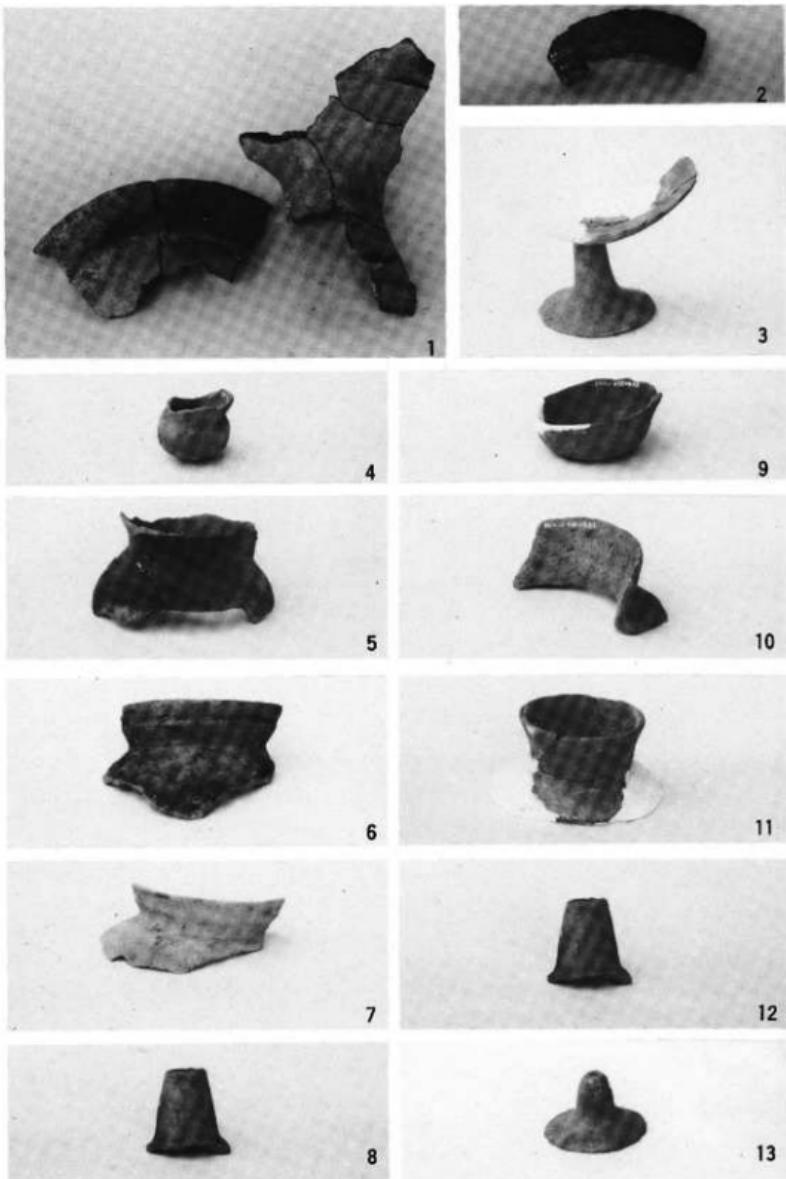


矢頭横穴前景



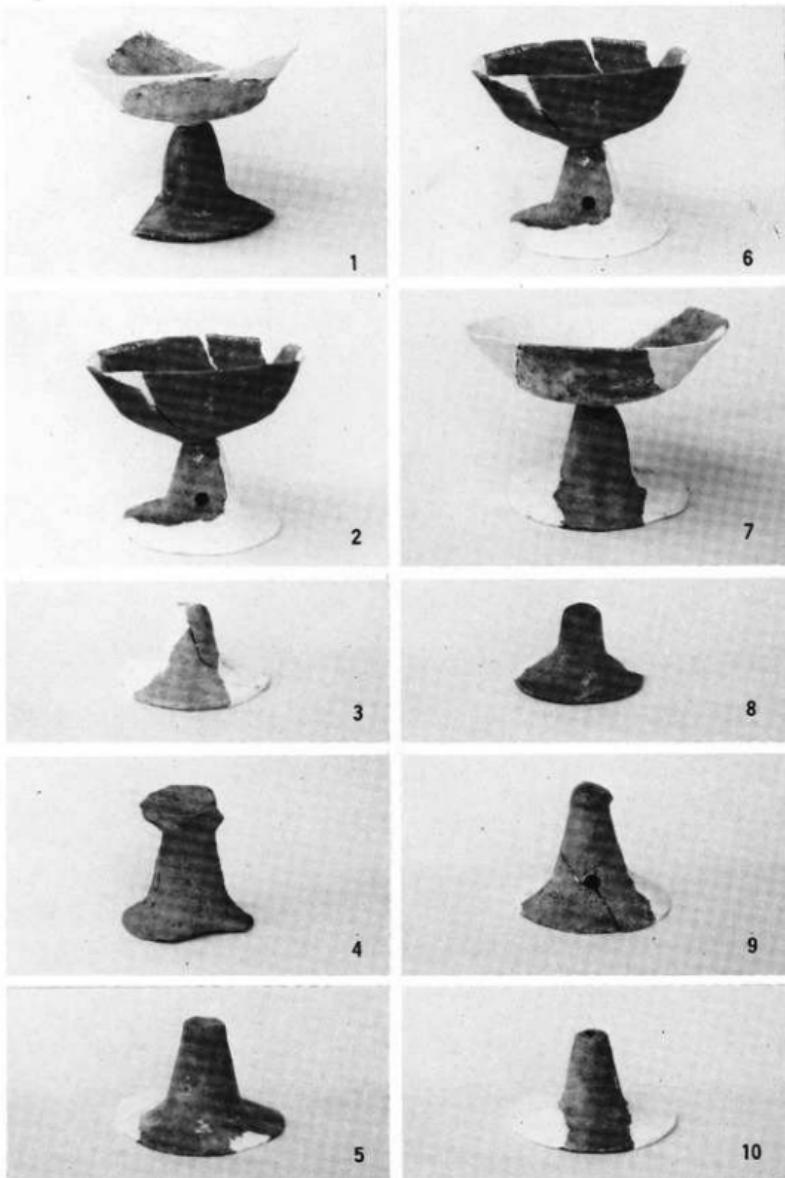
矢頭横穴遠景

図版 13



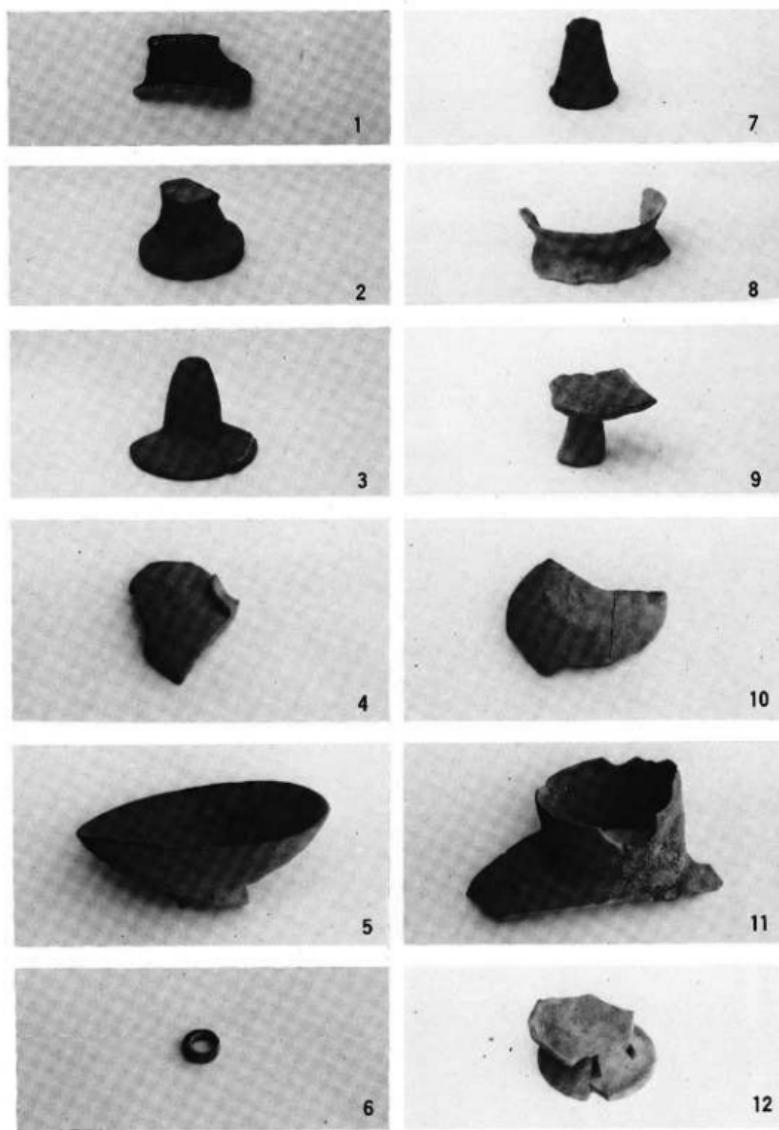
清水谷2号墓(1.2)、矢頭1号住居跡(3)、矢頭2号住居跡(4~13)出土遺物

図版 14



矢頭 2号住居跡出土遺物

図版 15



2号住居跡(1.7)、5号住居跡(2.3.8.9)、矢頭横穴(4~6,10~12)出土遺物

宍道町埋蔵文化財調査報告 4

清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書

昭和 60 年 3 月 15 日印刷

昭和 60 年 3 月 25 日発行

発 行 宍道町教育委員会  
八束郡宍道町大字昭和 1

印 刷 松栄印刷有限会社  
松江市西川津町 667-1